

## ネパール 2022 年秋、トレッキング(アンナプルナ方面)と交流の旅

長谷川 隆

トレッキングコース：アンナプルナ方面（ゴレパニからガンドルン、マルディヒマール）。（4名）

長谷川はマルディヒマールに行かず、チトワン、カトマンズで学校、音楽家訪問など  
旅の期間：2022年10月19日～11月9日（八王子・片倉台関係者4名）

2022年10月19日～11月12日（長谷川）

航空便：ネパール航空（往復17.6万円：4人。19.5万円：1名）：直行便

行き：成田10時半発～カトマンズ16時頃着（7時間半の予定）

帰り：カトマンズ23時半発～成田9時頃着



ダウラギリ



マチャプチャレ

### 前書き

大学時代にランタン谷にトレッキングに来て、卒業後に青年海外協力隊でネパールに2年間滞在し、8回目の訪問となった。トレッキングは4回目となり、自分なりに音楽家や学校も訪問して交流してきた。ダウラギリ、アンナプルナ、マチャプチャレの美しい雄大なヒマラヤを見られ、ティハール祭りの踊りも山の村で見て参加できた。なにより高齢者5人無事に山を下りることができた。ネパールから驚くほど多くの若者が日本にそして世界中に留学に、働きに出るようになっていく。コロナ明けに5人でトレッキングをするとともに、変わっていくネパールを見、いろいろな人と会って来た。

### 目次

#### Page

1-4 準備

6-23 トレッキング1日目～15日目：ゴレパニ、マルディヒマール

7 ゴレパニの宿の小学生

8 巡礼の人々とジヨムソムまで歩いた思い出

- 9 94歳まで40年間ネパール農業開発に捧げた近藤亨さんの思い出
- 13 40代の奥さんが外国で介護の出稼ぎ
- 17 ティハールの踊りで出会った、東京中野で5年働き、結婚しイギリスに住む女性
- 23 10月26日(水) ガンドルンからバスでポカラ経由、バンディプールへ
- 24 10月27日(木) バンディプールからチトワンへ
- 25 イギリスで働き家族で住んでいたが、父親の介護のために単身帰国した男性  
10月28日(金) マウルカリカの山のお寺へ
- 26 チトワンの日本語教師マダンさん  
インド留学したミスラさん
- 27 マダンさん一家の外国で働いた経験
- 28 チトワン ソウラハ自然公園で象やワニを見る
- 29 カトマンズ ホテルオーナーの話：従業員の高給要望
- 30 大学4年の仲間40人が7日間でランタンを楽しくトレッキング  
フロリダで留学、勤務のパダムの息子さんと会う。
- 31 トーラン・カルキさん宅を訪問。医療界の重鎮の息子。
- 32 バイクでニューロードに散髪、服の修繕、買い物に連れて行ってもらった
- 33 バネパのHachiko日本語学校、カトマンズ大訪問
- 35 パダムさん（協力隊で柑橘栽培カウンターパート）のご自宅訪問  
11月4日 キルティプールのサラング奏者 Prince さん、プージャさん宅訪問
- 37 11月5日 中高生音楽グループと交流。ブダニールカンタ見学。日本映画会参加
- 38 11月6日 キルティプール、パタン観光  
40 シタール演奏会
- 40 11月7日 バクタプール（カトマンズから車で40分。寺院の美しいネワールの古都）
- 44 11月8日 カトマンズ： スワヤンブナート。ボードナート。ダルワール広場
- 45 11月9日 日本語学校、技能実習生送り出し機関訪問
- 46 11月10日 バグマティ校訪問、音楽交流。日本人会に参加
- 47 11月11日 日本語学校、民俗楽器博物館、スラム街の無料塾、トレッキング社長宅訪問
- 49 別紙 ネパール民族楽器博物館設立者
- 54 ネパール・アンナプルナ方面・トレッキング費用概算
- 56 関連情報： 為替、賃金、物価
- 57 トレッキング日程記録表
- 58 アンナプルナ トレッキング地図と宿泊地
- 60 ヒマラヤトレッキングで見た野鳥と植物

## 準備

- ・トレッキング参加メンバー：5名。市川、吉川、門口、山崎（以上、申し込み順）、長谷川

5年前に5人でエベレスト方面に行ったうち女性2人参加した。私は当時、仕事で長期休暇はできなかったが、定年退職後で参加できた。新たな参加者は、78歳と75歳の方で、野鳥の会でよく歩いている方、山の会でベテランの方で二人とも元気。

他に3人が参加希望だったが、1人は一番意欲があったが5年前に腹の調子がすぐれずネパール食が食べられなかったこと、78歳で膝も悪くなり人様に迷惑をかけられないということで5月の航空券発注日朝に不参加表明された。1人は孫が生まれる時期で3週間以上も行くのは難しい、とのこと。もう1人は奥様の看病でもう一度行きたいところを断念された。

参加者の年齢は、78, 75, 69, 64, 62歳。



ダウラギリ

- ・高度順応等のための登山と打ち合わせ

4人が高度順応対策に富士登山に一泊で登った。残念ながら雨に降られた。Family Alpine Trek社のLakpa社長（エベレスト登頂経験者）は、富士山のように1日で急激に標高を上げる山登りが一番高山病にかかりやすい、ネパールのトレッキングのように、何日も日数をかけて高度をあげていけば大丈夫、とのことだったので、私は高度順応のための富士登山は参加しなかった。（膝痛もあり、下りが長いので）。なお、今回の旅の最後のカトマンズ盆地の3古都の観光の運転と案内をしてくれた、スンダル・ラマさんは、トレッキングガイドも15年ほどもやっていて、100組以上のガイドをしたが、高山病になることは一つもなかったという。標高2,500m以上では絶対お酒は禁止とか、水をたくさん飲む等のルールで防げているそう。お酒も規制されるといかなものかと思ってしまうが安全な山旅は第一だ。

準備の打ち合わせを4月から4回。一度は八王子駅南口のネパールレストラン・サティで。

- ・コロナワクチン接種証明書、デング熱対策グッズ、海外旅行保険、ビザの用意

八王子市保健所などから英文コロナワクチン接種証明書を各自取得した。また4人はビザを日本で取得した。私はカトマンズの空港着後入手した。また夏場にカトマンズでデング熱が蚊の伝染で広まっているということで蚊の対策グッズも準備した。10月にはデング熱は減っていたが、ネパール人の知り合いも夏場に何人か急な症状悪化で入院などしていたので注意が必要だった。コロナについては、現地ではネパール人も外国人もほぼマスクはしていなかった。

海外旅行保険（高山病でヘリコプター使用に必要）に各自入り、ビザは現地空港で取得した（4人は出発前に日本で大使館にて）。

私は、1週間のトレッキングの用意と2週間強のカトマンズ・チトワンのたくさんの訪問の準備で、荷物は山のようにあった。なかでもカレー粉、抹茶など日本の食品をたくさん頼まれていて仲間にスーツケースを一つ分担してもらって荷物を空港で預けた。

#### ・トレッキング計画、期間

私が8回ネパール訪問し、4回トレッキングを経験し、日常ネパール語会話と英語が一応できることから、私がネパールと交渉して計画を立てることとなった。

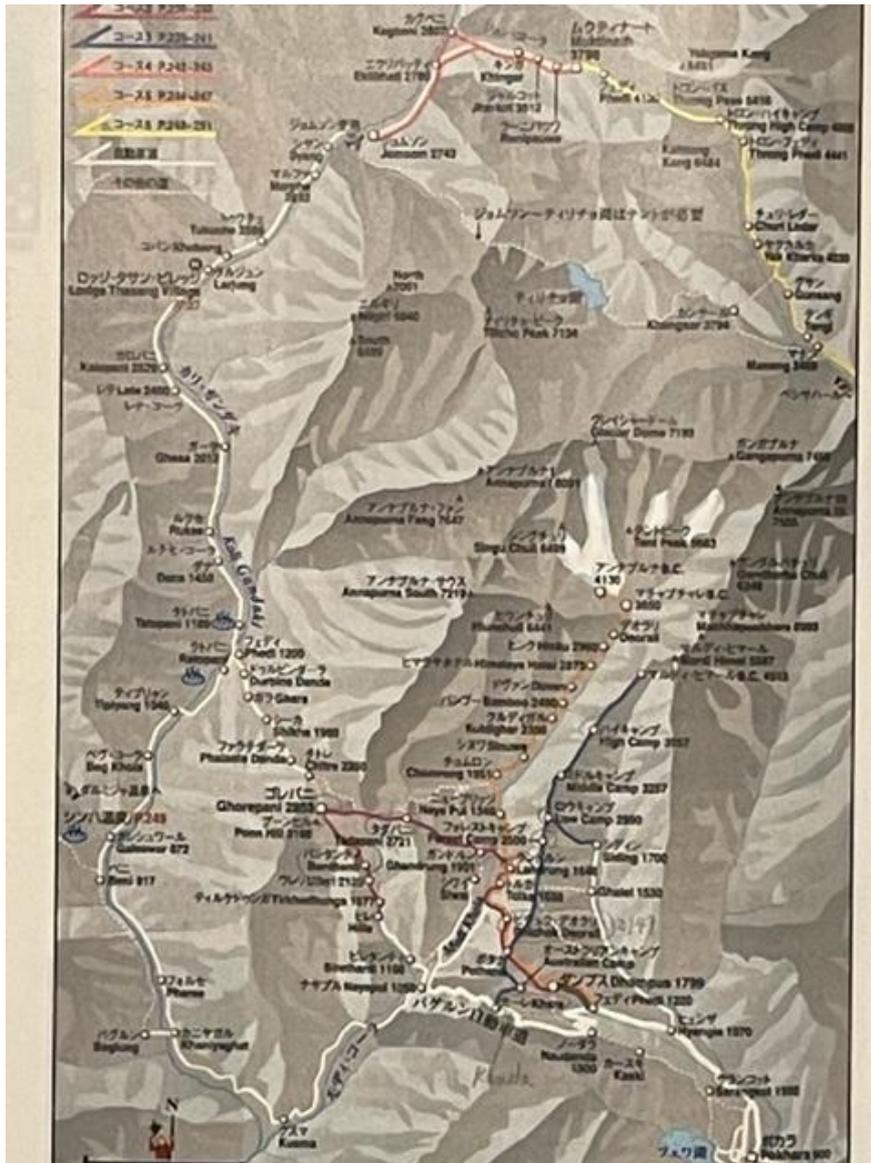
5年前にエベレスト方面に参加した一人は、ナムチェバザールから何日か上がったところの診療所で、高山病の症状が出て危険なのでヘリコプターで下山を勧められ一人やむなく翌朝カトマンズへ帰っている。今回は高山病で下山することにならないよう、慎重にスケジュールを考え、日程に余裕を持たせ（予備日を2-3日入れ）、ゆっくり高度をあげて順応する計画を立てた。また9月初めまでは、帰国便の72時間以内のコロナ陰性証明が必要だったため、カトマンズでの滞在を3日間取り、その分観光の予定を入れた。

#### ・トレッキングコースの選定



二人が5年前にエベレスト方面に行ったことがあり、私がランタンに6月行っており、3大人気コースの残りのアンナプルナ方面とした。またアンナプルナ内院コースより、マルディヒマールは新しくできた尾根コースで景色がよいという話だったので、マルディヒマールを入れ、そしてゴレパニ・プーンヒルからダウラギリの大パノラマを見るコースとの組み合わせとした。

・ポカラ⇒ゴレパニ（プーンヒル）⇒ガンドルン（別名ガンドルック）⇒マルディヒマール



アンナプルナ地域

トレッキング会社判断で、予備日（高度順応休息日）はなくし、マルディヒマールコースは遠回りし毎日少しずつ歩くことになった。

私はカトマンズ、チトワンで日本語学校や音楽家を滞在中に訪問・交流したく、やむなくマルディヒマールコースを断念することとし、ガンドルンから下山することとした。



マルディヒマール ファーストビューポイントより、アンナプルナサウス、マチャプチャレを望む

#### ・トレッキング会社選び

私の 40 年前からの知り合いの会社か、数年前からの知り合いで最近日本語学校を創った人の会社か、そして 5 年前のガイドの会社の 3 社からトレッキングの見積もりを入手し比較検討した。費用は大きな違いはなく、何度も何度も細かく個別費用をメールで確認しているうちに相当安価なものになったようで、これでは利益が出ないとも言われほどだった。結局、私が途中下山するなら 5 年前と同じ会社が安心だとの希望がでて、Family Alpine Trek（私が 6 月にも利用）になった。ガイド・ポーター代（保険代含む）、宿代、食事代、交通費の個別の合計より、全て込みの Package 料金の方が各社とも安価であり、Package 料金にしてもらった。Package 料金の方が、食事は何を食べても変わらないし、最初に一括で支払うので自分たちでお金を持ち歩かなくて済む。またその料金で、毎朝、行動用のお湯もいただけた。



ポーターたち ガンドルンにて

#### 旅の記録：

2022 年 10 月 19 日 日本出発、カトマンズ着

・八王子市の片倉駅を 5 時前の一番電車で 4 人は出発。二人の奥様に駅まで車で送っていただいた。一人相模原から。7 時半に成田空港出発ロビーで集合。

・10：30 成田発—16:30 頃カトマンズ着のネパール航空直行便。乗客は 98%以上がネパール人だった。赤ちゃんの泣き声があちこちから聞こえ、日本で学んだり働いて家族連れ若い人で満杯だった。反対に日本人を探すに苦労した。直行便で秋のヒマラヤがきれいな時期なのに。特に若い日本人はネパールに来ないそう。日本人はコロナ前の倍の値段の航空券を買って海外旅行する余裕がないのだろうと思うが、ではネパール人のこの熱気は？と思う。ネパール人には 10 月はダサ

イン、ティハールのお祭りで、なんとかネパールに帰って親や家族、親戚に会いたいという強い想いがあるであろうが。

日本の会社で働き 10 年ほど滞在していた Akshala 社のギリさんは、ネパールの方が楽しい、だから帰りたいんだと言っていた。お祭りも長く多く、家族、親戚、出身地のつながりがとても強いネパールだ。

タメールの Fuji Hotel 到着後、近くの両替屋で最低限の 1-2 万円分をネパールルピーに換金。Fuji Hotel の裏にある、ネパールの踊りのあるレストランで、社長家族とガイド、ポーターとの歓迎があった。6 月に私のガイド・ポーターだったヌルブさんも来てくれ再会した。

10 月 20 日(木) ポカラまで車で 10 時間

8:00 カトマンズの FUJI ホテル発 (210 km 車で移動) ⇒ 18:00 過ぎ ポカラ (ABC ホテル)

- ・日本語のできるガイド 1 人。ポーター 3 人うち二人は親子。日本人 5 人の総勢 9 人及び運転手。ラクパ社長に見送られハイエースで出発した。



FUJI Hotel にて/

ラクパ社長、ガイドのパワンさん、ポーターのプロジュンさん、チャーリン・ジュヒンジュさん親子と

- ・カトマンズからずっとデコボコも多く、渋滞で 8 時間の予定が 10 時間もかかり、みな疲れた。途中、川沿いのダイナミックな景色で、ネパールの人々の生活ぶりが見えて、皆さん興味深そうだった。途中休憩時ににぎやかに騒いでいる一団があって見てみると韓国人のグループだった。25 人ほどもいるだろうか、この活気。大きな観光バスに乗ってトレッキングのようだ。日本人では今はこのような大きな集団では来ないだろうし、活気もないだろうと思う。お昼には河が蛇行して、崖の斜面の景色の良いユニークなレストランでネパール料理をいただいた。夕暮れ近くなりポカラに入るとアンナプルナ、マチャプチャレ、マナスルの白い頂が車窓からいつまでも見えて感激した。



ポカラのホテル前の庭で女性主人と

10月21日(金) トレッキング1日目

8:15 ポカラ (800m) ABC ホテル⇒ナヤプル(1050m)⇒11:00 過ぎ ティルケドンガー(1577m)⇒14時半過ぎ:バンタンティ(2210m) グリーンヒル・ビュー・ゲストハウス



フェワ湖



車で山越えでのヒマラヤ眺望

朝、大勢のネパール人観光客がいるフェワ湖を見た後、ポカラからジープで山へ。途中の山越えの展望台でヒマラヤを眺めに行くと二人のネパール女性が寛いでいて、尋ねると、カトマンズから契約で山間部農村地域に女性の医療・衛生関連の調査に行くそうだ。ナヤプルから山道に入ると、ひどいでこぼこ道で上下に激しく揺すられ、水田や四国ビエの収穫作業を見ながら登り口ティルケドンガーに着く。以前は何時間も歩いた道を悪路ながら車が通れる道ができていた。それでも大勢の欧米のトレッカーは何時間も歩いていた。

車で下りたティルケドンガー手前から稲作がなくシコクビエ(ネパール語:コード)になった。シコクビエで作るディーロという黒い飯はおいしくないが体は強くなるそうだ。

2時間半車に乗り、ティルケドンガーに11時過ぎに着いた。15年ほど前にムスタンのジョムソムで農業開発をしていた近藤亨さんに会いに来た時は、このでかい石がごろごろしている道は、だいたい歩いて来たものだ。ティルケドンガーでお昼を取り、4時間ゆっくり歩いてバンタンティに着いた。外国人が大勢歩いていて、ネパール人も4組位出会った。ティルケドンガーからバンタンティまでの間にあまりにたくさんの茶屋やホテルがあり驚いてしまった。またチョウタラという道の休憩所になる大樹が、東ネパールやカトマンズにはあるが、このトレッキングルートでは人工物の石碑が建てられていた。

バンタンティに着くと、秋の桜が咲いていた。夕食後、大きなストーブの周りに4人のガイドとポーターがいたが、皆が携帯をいじっているのだった。

10月22日(土) トレッキング2日目

8時半過ぎバンダンティ (2210m) ⇒ナンゲタンティ (2460m) ⇒13:10 ゴレパニ (2850m)  
マウンティンビューロッジ



バンタンティで朝出発前に



山羊を町に売りに行く。2日ばかり？



今日は、欧米の20人ほどの高校生のグループに出会った。もしかしたら欧州から来たのだろうか？あるいはネパールにある学校？ポカラからも高校生の20人ほどのグループがトレッキングに来ていた。ポカラからなら3日で往復できるかもしれない、このゴレパニ、プーンヒルのコースは、手軽なので高尾山的に観光的になりすぎた感じだ。楽しいが。

ガイドの話では、東ネパールのガイドの出身の村に5年前からトイレが全部の家に設置されたそう。歴史的なことだ。私が43年前にいたボジプールの山の村ではトイレのある家はなかった。ゴレパニの峠に大きなホテルが60軒ほども乱立している。何しろポカラから車と二日間の歩きでたどり着けて、ダウラギリ、アンナプルナの雄大なヒマラヤを見渡せるプーンヒルに近いのでこれだけあっても多くの登山者が来るのだろう。

ゴレパニの宿では夕食前に私は夕暮れ前に広い屋上？でダウラギリを眺めて、しばしフルーツを吹いた。15人くらいの欧州の高齢者のグループがテーブルを囲んでいた。アンナプルナ一周を2週間ほどで回ったそう。さすがだ。

ゴレパニの宿の小学生：

ゴレパニで泊ったホテルでは小学生の子供がいて、普段はポカラのプライベートの学校で勉強している。そしてティハールの5日間ほどの祭りの時にゴレパニに戻ってくるという。外国人のトレkkerがとても多いので手伝いに来たと言う、小遣い稼ぎにもなるのだろう。

この日はこの子を迎えに車の道路があるところまで行くという。トレkkerは車の道路は使えないが、ゴレパニに住む人達は生活や商売のために使えるようだ。いつかこのトレッキングコースも歩かなくて車で来られる観光地になってしまうかもしれない、そう思うときみしい気持ちになる。ネパールの公立の学校は、ダサインの祭り10日間から、その2-3週間後にある5日間ほどのティハールの祭りまで続けて1か月ほど休む。一方、プライベートスクールではしっかり教えるため

に二つの祭りの間も学校があるようだ。

子供の将来のためによい教育を受けられるよう無理して高い学費のプライベートスクールに入れようとする親がとても多い。月に何万円もするようだ。プライベートスクールでは英語ですべての科目を教える。ネパール語の授業は別に週に5時間くらいだろうか。ネパール人の多くが英語が達者なわけだ。



ダウラギリ I (8172m) プーンヒルから

巡礼の人々とジョムソムまで歩いた思い出

15年ほど前に8月にポカラ(標高900m)からゴレパニを經由して、ジョムソム(標高2,743m)まで7日、さらにムクティナート(標高3,798m)まで2日歩いたことがある。ゴレパニに2日間で着いたが、その夕方は天気がすぐれずヒマラヤは見えない状況で、一緒に来た韓国人女性2人のグループはガイドの判断で翌朝ゴレパニのヒマラヤが見えるところまで登らずにポカラに戻ってかわいそうだった。翌朝、快晴だったのに。

長い下りを1日半ほどかけて下り、カリガンダキ川沿いにジョムソムまで歩いた時に、ポカラ方面の村から7-8人の女性たちの巡礼と一緒にになった。彼女たちは米など食料は担ぎ、巡礼宿で泊りながら聖地ムクティナートに向かうとのことだった。何日か一緒に歩くことができた。彼女たちは往復2週間ほどもかけて歩くのだろうかと思った。日本でも江戸時代は、はるばるお伊勢参りと言って長い日数を歩いて参拝の旅をしたわけだが。今はもうポカラからジョムソムまで車の道路ができて今はバスで10時間で着いてしまう。私が歩いた時は、川沿いの道はあちこちで地滑りにより、川沿いなのに道が上り下りを繰り返す必要があつて大変だった。ジョムソムからムクティナートに向かう道は荒涼として、まずは崖の下の広い川幅の道を行かねばならず、近藤さんはこんな怖い道を馬に乗ってさらに上のムスタンの農場に行ったのだと驚いた。

私は夕方遅くムクティナート(標高3,798m)に着いて、少しお酒で寛いだが、夜に高山病の症状として頭痛がひどく出た。

#### 94 歳まで 40 年間ネパール農業開発に捧げた近藤亨さんの思い出

ゴレパニ、プーンヒルから見る事ができたニルギリの麓にジョムソムがあり、近藤亨さんの農場があった。15 年ほど前、私は当時近藤さんのムスタン地域開発協力会を少し支援していて、その活動を見学にポカラから 7 日間歩いて行った。近藤さんは成功した養殖のニジマスを生きたままにして振舞ってくれた。翌朝、ジョムソムの事務所から近藤さんが馬に乗り、ジョムソムの通りを颯爽と進む姿には驚くものがあった。農場では鶏の飼育、アメリカが失敗したものを蘇えらせたリンゴ園、そして 4 年間失敗の末に 5 年目で実らせた水田を見せてくれた。水稲は標高が世界で一番高いところで収穫できてギネス記録になったそうだ。ムスタンは寂寥とした不毛の地のような所だ。水稲栽培はジョムソムのように標高が 2,743m と高く、ヒマラヤから流れ下る冷たい水と寒い風が吹く土地では難しいものだったが、それを技術力で克服したのだ。

近藤さんはこの農場で実際にいろいろな農業をやって、やっと本当の農業の楽しさを感じた、と言っていた。近藤さんが私に、一番大変だったのはなんだと思う、と聞いてきて、なんだろうと思っていると、それは植林だよ、と言われた。植林は苗木を植えて花が咲いたり実がなったりしないが、ちゃんと水やりなど世話をしないと苗木は枯れてしまうのだろう。その世話をしっかり愛情を持ってやるように 150 人ほども雇っていたという村の教育も受けていない労働者に教えていくのは大変だったのだろう。またホルスタイン牛という乳量の多い品種を標高の高い地区で飼育できるようにもした。

近藤さんは、新潟の加茂の出身で若い頃に肺を患い、戦争に行けず、自宅療養を何年もし、それから文学の道を断念して、20 代前半で農林学校に入られた。果樹園芸を専門として地元の大学で教鞭を取られ、そして県の果樹振興に移られ、55 歳で JICA 国際協力事業団の果樹専門家としてネパールに派遣された。そして 70 歳まで JICA の大きなプロジェクトで葡萄、柑橘、栗の栽培振興に携われた。

私は、新潟出身で近藤先生が教えられた大学で園芸を学び、そしてネパールに果樹栽培指導で青年海外協力隊で来た。当時は赴任地からカトマンズに出るたびに近藤先生に教えを乞いに自宅に伺い、またキルティプールの果樹試験場などに連れて行ってもらった。



ニルギリ アンナプルナ I アンナプルナサウス

近藤さんは JICA 専門家を 70 で定年となり、奥様から日本に帰ってゆっくりしましょうと言われたが、近藤さんはネパールで一番開発から見放され貧しい秘境のムスタンに残りの人生を

かける大決断をされた。そして新潟の加茂の先祖伝来の田畑を家族親戚の反対を押し切って売り、私財を投じてムスタンに農場を開かれた。94 で亡くなられるまでいつも、ネパールに骨をうずめるのだ、ネパールが一番貧しい、見放された地に農業開発という私の技術で捧げるのだ、その生きざまを見せるのだ、と言われていた。また戦争でアジアの国々に大変な迷惑をかけた日本はアジアにこそ支援しなければいけない、戦争を生き延びた自分がやらなければいけないと。年寄りだからと日本でぬくぬくと生きてはいられないと。

ムスタン地域開発協力会 (MD S A) は、新潟を中心に日本全国に会員 1300 人を擁するに至った。私も大阪支部や東京で応援させていただいた。近藤さんは 1 年に何度か全国の支援団体を訪問しては報告会を開き熱弁をふるっていられた。そして現地では、ヒマラヤ山腹の荒野を 150 人もの農場職員と一畝一畝開墾し、アンダームスタンのシャン、テニ農場計 45ha、寒冷強風のアップームスタンの標高 4000m のガミ農場に 200ha の農場を造成した。そしてムスタンの極貧の村々に計 17 校の小、中、高校を建設し、ガミ病院を開所、運営し、村々に道路を開いたのである。私が訪問した時には、近藤さんの建てた学校を支援しようと学校給食を始めるために、女性が早期退職してムスタンにもう 1 年も住んでいると言っていた。また新潟から青年が近藤さんの活動を応援しようと 3 年ほども活動していた。

近藤さんは、気骨はあるが、発言が鋭いこともあるのかいろいろ非難する人もいたが、専門家時代からの使用人などとても大事にされていて、そのままムスタンでも働いてもらっていた。JICA 専門家時代に近藤さん宅にお手伝いとしていた踊りがうまかったサンタさんは近藤さんを心から慕い、長年仕えて、最後は王家の人に嫁ぐこととなった。そしてその妹さんもムスタンで働き、近藤さんが亡くなった時には号泣していた。10 年ほど近藤さんのそばで支援していた日本人女性も亡くなられてとてもとてもさみしがられていた。

ジョムソム農場を訪問した際に、私に 5 年したらまたムスタンにいらっしゃい、と言われていたが再訪問はかなわなかった。近藤さんのムスタンの短歌が朝日花壇に載っていた。

・力尽き群れを離れて舞い降りし 幼き鶴を胸に抱きぬ

7-8,000m のヒマラヤを鶴の群れが風に乗って超えて行く。時に越えられない小さい子鶴がいたのだ。

10 月 23 日(日) トレッキング 3 日目

6:00 ゴレバニ (2850m) ⇒ 7:20 プーンヒル (3200m) 8:00 過ぎ ⇒ 8:40 ゴレバニ 11:00

⇒ 峠の茶屋 ⇒ 14 時過ぎ デウラリ (3100m)

ヤクホテル



朝日に映えるダウラギリ



プーンヒル 3198m でダウラギリ I (8172m) を望む

朝、5時にホテルを出発してプーンヒルの頂上でご来光を見ようとする他の多くの登山者がいたが、パワンガイドが6時出発で十分ということで、6時に出発する。途中からダウラギリの雄姿がきれいに見え、だんだん朝日がさしてくる。これをみんなに見てもらいたかった。快晴でよかった。すでに多くの登山者が下り始めていた。早くポカラに下りようとするのだろうか。標高 3000m くらいでもシャクナゲ等の樹木が生い茂る。1時間半ほどで頂上に着く。ダウラギリ、ニルギリ、そしてアンナプルナサウス、そしてポカラ方面が望める。360度の大展望だ。多くの観光客を集めるわけだ。ネパール人のグループも喜びいっぱい記念写真を取っている。展望台に上がる。ガイドのパワンさんに、ポーター3人と我々5人の記念写真を取ってもらった。風が強く寒いので早々に下り始める。1時間強で宿に戻り、朝食兼昼食を取る。早く着いたので、この日のうちに前進しておいた方がよいと考え、3時間ほどというデウラリに向かうことにする。



アンナプルナサウスを背に

3000m の大展望の茶屋の上を、大鷲が2羽、旋回して悠々と飛んでいた。野鳥の会の門口さんは大喜びで、望遠鏡で見たり、大きなカメラで写真に収めようとしていた。標高 2500m 以上は石楠花が高さ 20m もあり樹林帯になっていて驚く。デウラリでは宿が2軒だけ。馬、水牛の子がホテルにいる。疲れて目的地にたどり着いたのに、高齢の門口さんが鳥を探しに10分位も高台目指して登って行ったので驚く。宿の前でフルーツを吹いていると、若いネパール人が私に携帯で映画タイタニックの音楽をアプリで楽譜を演奏しやすいように動かしていて、これに合わせて演奏できるか聞いてきた。こんな山の上の宿で、と驚き。演奏してやると、あなたは音楽家と聞かれた。トレ

ツカーのネパール人が歩いてきて膝が痛いので痛み止めの薬がないか聞いてきた。我々のグループの中から痛み止めの薬を数日分渡してあげた。こんな裏街道的などころの宿に大きな馬に乗ったネパール人客が通り過ぎて行った。



デウラリのヤクホテル



水牛の子

10月24日(月) トレッキング4日目

8:00 デウ拉里 (3100m) ⇒9:50 バンタンティ ⇒12:30 タダパニ (2750m)

ホテルグランドビューロッジ

朝おきて、馬小屋の馬と上の畑の小屋の水牛の赤ちゃんに挨拶する。

9時50分バンタンティに着き、数軒ある宿のひとつで紅茶(チャ)タイムとする。30分ほど休んで、タダパニに向かう。この辺の宿主たちは、カーストの上のチェットリたちが多くようだ。エベレスト、ランタン方面ではチベット系のシェルパ族等が一般的なので驚いた。宿の女性主人はこれからティハールの祭りで弟が他の村からやってくるのでとても楽しみだと言っていた。

谷の川を渡って30分ほど急坂を登ってたどり着いたタダパニ。そのタダパニはアンナプルナ、ヒウンチュリ、マチャプチャレが眼前に見える絶景の場所だ。景色がいいのでホテルもたくさんある。ガイドとポーターの4人は、宿の子が大きな竹製の籠で担ぎ上げたたくさんの大根を細く切って干せるようにする作業を数時間手伝っていた。お金ももらわずにすごい。細かく切った大根は広いタン屋根の上に干されていた。



タダパニのホテル

大根を運んでいた子は女将さん(サウニ)の甥っ子だ。ゴレパニの子と同様ポカラの Boarding school で学んでいる。祭りが終わればまたポカラに戻るがまだ小学5年生くらいだ。ゴレパニにはホテルしかなく学校がないからしょうがない。何匹も猿がホテルの下の畑にやって来て、キャベツを食べに来るのでトレッカーたちが石を投げて追い返そうとする。

我々のホテルで韓国人かと思われるすらしとしたあまりの美人を見かけた。その洗練されたスタイルに、韓国に住む人ではなくアメリカあたりに住む人かと思われた。運よく夕食時に斜め前の席に座られたので声をかけてみた。父親が LG 電子でインドのボンベイに 18 年ほど駐在していたそう。日本企業はこのように駐在員を同じ国に長く駐在させないで 3 年ほどで交代させる。長期に駐在させ現地事情をよく把握した人がローカルの人とのネットワークを深くしてビジネスをやるのが重要だ。韓国は現地に大きな決定も任せると言う。だから現地主導での決定も早い。日本も見習うべき点だ。LG 電子で 18 年間もインドにいて、その間、日本に追いつけ、追い越せ、を体現してきた歴史の経験者なのだった。

彼女は旅に出てから知り合ったという欧米人男性とトレッキングしていた。英語が滑らかなのはインドでインターナショナルスクールにでもいたからか。彼女は大企業には務めたくなく、小さい創業したばかりの会社で働きたいと言っていた。日本と違い、起業意欲盛んな若者が多い、伸び行く韓国を感じるばかりだ。

夕食時に隣にいた 40-50 代の二人の女性はオランダ人で何かの専門医とのことだった。



タダパニ朝、アンナプルナサウスとヒウンチュリ。 マチャプチャレ 夜明け。

ラクバ社長と同じ村の同級生で 48 歳のジフィンジさん、ポーターをいつまでもやっていて大変だが、今は 20 歳の息子さんが一緒にポーターで参加している。ジフィンジさんは体がものすごく大きくて手足も太くたくましいのだが、根はやさしくて穏やか。なんと彼は歩いて 4 日目の今日、膝が痛くて困っているが薬もないし大変だ、というではないか。まだ 10 日近く担いでもらわないといけないうのに。心配して我々の高い膝サポーターを貸してやろうと装着しようとしたが、膝周りが太すぎて、どうしても付けられない。それでサポーター効果は弱いが伸びて履けるタイプのものを付けてもらうことにした。それでなんとかトレッキング最後まで担ぎ通してくれた。

40 代の奥さんが外国で介護の出稼ぎ：

そして彼の話では、なんと奥さんは、中近東の島国、キプロスに介護の仕事で出稼ぎに 3 年前から行っているという。もう 40 代半ばで。家族親戚 8 人が一緒にカトマンズで暮らせるよう、ジフ

インジさんと奥さんの稼ぎで部屋代と生活費をやりくりしないといけない、大変だ、と言っていた。それでは膝が今から痛いのでは心配だと益々思った。現在、ネパールから中近東を中心にマレーシア、韓国、日本など140以上の国に出稼ぎに行っているという。本当に会う人の多くが家族、親戚が外国にいると言う状況だ。

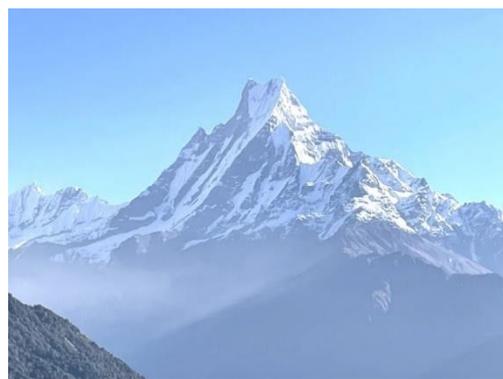
ポカラからトレッキングに出て、バンタンティ、ガンドルン、デウラリ、ガンドルンと泊り、驚いたことにローカルのお酒、チャンがホテルに置いてなかった。チャンはアルコール分が5%以下位で低く、気軽に飲めるものだ。ランタンのトレッキング中は毎日飲めたのに、こちらでないのが、がっかりし驚いた。ランタン地域にはチベット系の人がホテルをやっていて、下の村のチベット系の人々がチャンを作って上の村に20Lも担いで売りに行っていた。この地域ではホテル経営をインド系のチェットリ族がやっていて、それが背景にあるのかなと思った。ガンドルン村では、チベット系のお酒、トゥンバー（ヒエの実の粒つぶからアルコールがお湯を入れると出てくる。ストローで飲む）があった。

深夜に目が覚めて空を見上げると満天の星。感激。闇夜に浮かぶ左手の小さな灯りは、ネパール民族舞踊を極めた岡本有子さんが、最初に滞在していた天空の村チョムロンのようだ。

10月25日(火) トレッキング5日目

8:40 タダパニ (2721m) ⇒13:10 ガンドルン (1951m)

ブリーズゲストハウス



タダパニ 2750mから、朝日がさす、アンナプルナサウス 7219m、ヒウンチュリ 6441m、マチャブチャレ 6993m

朝、快晴。あまりに見事なヒマラヤの眺望。アンナプルナサウス、ヒウンチュリ、マチャブチャレ。朝日が徐々に登り、美しい山影が朝の青空に聳える。早朝から近くのホテルの景色の良いところを廻りよい景色の場所を求める。欧米のトレッカーが美しいヒマラヤに見入り、カメラを向けている。歩いていると、地元のおばちゃんがヒマラヤ牛のヤクの新鮮な肉を細長く切ったものを朝から外でぶら下げていた。タダパニ (2721m) にもヤクが時々下りてくるのだと言う。ヤクの肉料理をトレッカーに出すのかなと思う。



タダバニ (標高 2721m)

ホテル前

皆で写真を撮り出発。今日は緩やかな下りだ。溪流沿いの石段をひたすら降りること2時間ほどでロッジが4軒あるバイシカルに着く。多くのトレッカーとすれ違う。10時30分過ぎ、マチャブチャレがよく見える展望スポットで休憩。その後、歩いていると山崎さんの登山靴の靴底が剥がれる。吉川さんの持っていた、ガムテープで応急処置。しかしちゃんと別の靴を持っていて救われる。そしてグルン族の美しい村、ガンドルンに着く。ここには30軒以上のロッジがある。



ガンドルン村の入り口： アンナブルナ、マチャブチャレを仰ぐ

ガイドのパワンさんの案内で、村の散策とグルン族の博物館を見学。トレッキングの中では一番大きな村で、小学校や、郵便局、銀行、診療所などもある。博物館は、日常生活で使っていた農機具や食器、織機など実際に使っていた生活用品が展示されていた。ロッジに帰る途中に、民族衣装をまとった20人くらいの若者達の舞踊団が踊っているところに出くわした。ちょうどティハールの

祭りなのだ。見ていると一緒に踊ろうとお誘いを受け、男3人踊りの輪に。動きの激しい踊りなので、門口さん、山崎さんは途中で息が切れやめたが、私は最後まで踊り通す。誘われて若い女性に手を取られて踊ることもあった。お別れにチップ200ルピー（220円程）をお盆に入れると、みんなの拍手と、お礼にマリーゴールドの花をくれる。



ガンドルン村 ティハールの踊り



奥はアンナプルナ内院に至る

ティハールの祭りを皆さんが見れるようにとも考えて日本出発前にプランを考えた。マルディヒマールが先だと村がないので祭は見られないだろうと思い、ガンドルン村でティハールを迎えられるような日程を考えた。ネパール歴と西暦は異なることもあり、毎年祭りの日は大きく異なる。事前にファミリーアルパイン社のラクバ社長から聞いていたティハール祭の日程を考慮し、ゴレパニ、プーンヒル方面から始めることにした。またラクバさんがカトマンズのような街より村の方が祭は面白いとも言っていたのでガンドルンで見られればいいなと思っていた。

村の踊り手グループがホテルを周っていた。高校生や若い男女が、斜面にあるトレッキングのホテルを1時間づつ位で廻り、それぞれ前庭で踊る。躍り手より見ている人が多い。ガンドルン村で3チームほどが廻っているようだ。村からは雄大なヒマラヤが仰ぎ見られる。

我々のホテルにはだいぶ前に日本人が土産に持参したであろう立派な日本酒の一升瓶が飾ってあった。オーナーは、昔は日本人がたくさん来たが、最近はずっかり減った、と言う



民族衣装の娘たち



ガンドルン村でのティハールの踊り：朝7時から夜10時まで

ティハールは全国的なヒンズーの祭だ。しかしチベットから逃れて来たラマ教の人たちは、ラマ教の祭しか祝わずティハールなどは祝わない。キリスト教徒もイスラム教徒も同じくティハールは祝わないと思う。40年前にいた東ネパールの山のボジプールでは、ティハールは祝ったが、踊りをやっていたのは、インドに接するタライ平原の種族の人達だけだったと思う。ガンドルンやバンディプールのように村全体でやる雰囲気ではなかった。ガンドルンは村全体がタマン族で一体化しているからだろうと思う。ボジプールは色々な民族が混ざっているからなのか、東ネパールはまた別の文化なのか。



ティハールの踊りで出会った、東京中野で5年働き、結婚しイギリスに住む女性

夕食後、夕方8時過ぎ、裏のホテルの前庭で踊りに私と二人のポーターとで参加した。私の前で踊っていた女性から休憩時に聞いた話では、彼女は東京の中野のコンビニ等で働いて5年ほど住んでいたとのこと。日本に住むのは大変だった、この村の出身の同級生がイギリスで大学を出て働いて、彼と結婚し、今イギリスに住んでいる、ティハールの祭りで休暇で帰国している、とのことだった。日本語が相当できないと日本は住みづらいだろうな、また日本語ができて大変かもしれないと思った。ガンドルンの村で日本滞在歴のある人と出会うとは驚き。また別の場所に行くと、夜の灯りの中で大勢の若者が集まり大変な盛況。外国の日本人の私が参加するとまた歓声があがる。夜10時まで踊って暗い入り組んだ道をポーターと帰ると、なんとホテルの鍵が2階の入り口にかかっている。これはやばいと思い、落ちそうな危険をおかして窓に鍵のかかっている所を探して、何とか侵入できた。ごそごそ音を立てていたらホテルの主人が起きてきてしまった。私にとって、朝、タダパニで素晴らしいヒマラヤを眺められ、昼も見られ、ガンドルンではグルン族のティハールの踊りが見て踊れて、とても楽しい幸せな1日だった。



ティハールの踊り：朝7時から



ティハールの玄関前の飾り 踊りで寄付を募る

翌朝、私はひとり山を下りた。以下は4人のマルディヒマールの記録。

10月26日(水) トレッキング6日目

8:00 前 ガンドルン (1951m) ⇒モディコーラ川 (1270m) ⇒12:00 ランドルン (1646m)  
ホテルハングリーアイ

ランドルンは、深い谷を挟んで反対側の尾根の中腹にある。ガンドルンとほぼ同じ高さなので、村の様子がよく見える。今日は川まで600m程下ってから、2時間ほど登ればランドルンの村。山を見ると、初めて朝から雲がかかっている。ガンドルンと同じように人数は少ないが、舞踊団が各ロッジを回っていて、夜9時過ぎまで音楽が聞こえていた。この村にも車が通れる道が通っている

10月27日(木) トレッキング7日目

8:10 ランドルン (1646m) ⇒トルカ (1650m) ⇒13:00 頃 ピタムデウラリ (2100m)  
ニューラリグラス

ネパールに来て初めて朝から霧。ランドルンからローキャンプ (3000m) 迄 1000mの直登の道があるが、我々の年齢も考慮してか楽な道を選択してくれた。1時間半ほど歩いたところで、長い吊り橋を渡る。馬もこの吊り橋を通るので頑丈に作られている。橋を渡り終わると登りの道になる。歩いていると、軒先に丸太で作ったミツバチの巣 (蜂蜜を取るためのもの) や水を使って大きな石臼を回している粉挽き小屋を見つけた。16時くらいから初めての雨。1時間ほどで止んだ。

10月28日(金) トレッキング8日目

7:30 ビタムデウラリ (2100m) ⇒12:00 過ぎ フォレストキャンプ (2500m) ⇒13:00 レストキャンプ (2640m)  
ホテルレストキャンプ

見通しのきかない樹林帯の尾根道をひたすら登ってフォレストキャンプ (2500m) に12時過ぎに着いた。さらに40分ほど登ってレストキャンプに13時10分到着。マチャプチャレ (6993m) がよく見える眺めの良い場所にある。この日以降、外国の観光客よりもネパール人が多いのにびっくりした。ネパールはこの10年でGDPが2.5倍に成長、豊かになった人も多いようだ。

10月29日(土) トレッキング9日目

8:00 レストキャンプ(2640m)⇒10:00 前ローキャンプ(3000m)⇒12:00 過ぎバダルダンプ(3200m)

マルディヒマールの稜線を登り始めてから、午前中は快晴でも、午後になると雲がわいてきて山が見えなくなってしまう。ローキャンプまでは見通しの悪い樹林帯の中を歩く。10時前にローキャンプに到着。12時過ぎバダルダンプに着いたが、雲の中で山は見えない。展望良いはずが残念。

10月30日(日) トレッキング10日目

8:50 バダルダンプ(3200m) ホテル360⇒11:00 過ぎ ハイキャンプ(3600m)

快晴。アンナプルナサウス、ヒユンチュリ、マチャブチャレなどの山が一望できる。登山道に沿ってロッジが分散しているミドルキャンプを過ぎて、11時過ぎにハイキャンプに到着。ハイキャンプに着いたときは、朝一望できた山々も雲に覆われてしまった。途中、昨日登っていった大勢のネパール人達とすれ違う。



朝のバダルダンプからの眺め

10月31日(月) トレッキング11日目

5:00 ハイキャンプ(3600m) ⇒8:00 過ぎ ファーストビューポイント(4200m)

⇒10:00 ハイキャンプ(3600m) 10:30⇒12:00 頃バダルダンプ(3200m) ホテル360



ハイキャンプ3600mのロッジで

門口さんから『風邪気味なので上まで登らず、ロッジで休んでいる』言われたので、ポーターのジュヒンジュさんに残ってもらい、ガイドのパワンさんを先頭に朝5時に出発。大勢の人がヘッドライトを付けて登っているので、光の帯が連なったように見える。6時を過ぎると足下がはっきり見えるようになり、山々にも朝日が当たり始める。3時間ほど登った8時過ぎにファーストビューポイント（4200m）に到着。



ファーストビューポイントからの眺め

ゆっくり、ゆっくり高度に順応させながら登ってきたので、高山病にもかからず登ってこられた。この先 4600mのベースキャンプまでトイレも休憩する場所もなく、往復4時間以上かかるので、ほとんどの人がここで下山するという。4軒ほど茶屋があるので、ミルクティを飲んで身体を温め、30分ほど景色を堪能して下山する。

10時にハイキャンプ到着。途中、日本人夫婦に会った。『仕事を辞めてネパールの友達の家で1ヶ月ほどホームステイして、ネパールを楽しんでいる』という。『日本に帰ったらまた働きます』と元気に話してくれた。日本で働いているネパール人も多いのか、すれ違うときに日本語で話しかけてくれる人が何人もいた。

11月1日(火) トレッキング12日目

8:00 過ぎ バダルダンプ (3200m) ⇒9:30 ローキャンプ ⇒12:00 フォレストキャンプ (2500m)



バダルダンプ出発前に



樹林帯を下る

お客が少なかったので、女将さんともゆっくり話が出来た（ガイドのパワンさんを通じて）。女将さん（32才）とご主人、女将さんの妹さんの3人で切り盛りしている。10月、11月営業するが、

12月になると寒くなり雪が降るので閉鎖する（富士山の山小屋と同じ）、5月～9月は雨期でお客が来ないので営業しない等。ガイドやポーター達が食事の配膳、後片付けをしてくれるので、3人でもやっていけるのだろう。女将さんは働き者で力持ち。トイレに大きなバケツで運ぶ水もヒョイと持ち上げる。

途中、長野県から一人で来たという女性に会った。『単独でのトレッキング、勇気あるなあ』とみんなで。10月28日に泊まったレストキャンプを通り過ぎてフォレストキャンプに12時に到着。ひよこが10羽くらい親鳥と遊んでいるのを見に行った。ジュヒンジュさん達も加わった20名弱のポーター達が夕方の5時過ぎまでバレーボールで遊んでいた。

11月2日(水) トレッキング 13日目

8:00 フォレストキャンプ (2500m) ⇒13:00 ピタムデウラリ (2100m) ニューラリグラス  
樹林帯の中をゆっくり下り、13時に到着。14時ダルバートで昼食。

11月3日(木) トレッキング 14日目

8:30 ピタムデウラリ (2100m) ⇒10:30 オーストラリアンキャンプ (2300m)

8時半に出発、上り下りが少ない道。10時30分にトレッキング最後のオーストラリアンキャンプに着く。12時にネパールうどん（トゥクバ）で昼食。宿泊ロッジは、バンガロー風の建物。



オーストラリアンキャンプ (左からアンナプルナサウス 7219m、ヒウンチュリ 6441m、マチャプチャレ 6993m)

ポーターの皆さんは水で頭や身体を洗ったり、竹で作ったブランコで遊んだりしていた。吉川さんもブランコ乗りに参加。竹と丸太でできているが、よく出来ている。午後3時過ぎると急に冷えてくる。ポカラから車やバスで1時間ほど乗ると登山口に行け、登山口から1時間ほどで登れる簡便さ、国立公園に入る入山料3000ルピーが不要なため、人気のミニトレッキングコースになっている。アンナプルナサウス (7219m) ～マチャプチャレ (6993m)、マナスル (遠くてぼんやりしていたが) まで一望でき、ロッジやテントで宿泊も出来、バーベキューを楽しめる。

11月4日(金) トレッキング 15日目 ポカラへ戻る

8:00 オーストラリアンキャンプ (2300m) ⇒9:00 過ぎカーレ ⇒10:00 過ぎ ポカラ ABC ホテル  
⇒タクシーで国際山岳博物館

カーレに向けて下る。かなりの急な石の階段を降りる。カーレから何人もトレッカーが登ってくる。9時過ぎにカーレに到着、待っていた車に荷物を積み込みポカラ ABC ホテルへ。10時過ぎにホテル着。荷物を預けて、国際山岳博物館にタクシーで向かう。1時間ほど見学。博物館に小中学校の生徒がたくさん見学していたが、門口さんを館長と思ったのか生徒達から握手を求められ、ニコニコ応じていた（門口さんの笑顔に何故か子供や動物達が集まってくる）。夕方、フェワ湖畔をパワンさんの案内で散策。夕食は、日本食・回転寿司「まんげつ」で、吉川さん煮込みうどん、他の3人は生姜焼き。オーナーに話を聞くと、青山の寿司屋で20年修行、知り合った社長の勧めで、店を開店したとのこと。



国際山岳博物館



館長と思われたのか生徒達が握手

11月5日(土) ポカラ観光し、カトマンズへ飛行機で

ポカラ 8:00ABC ホテル⇒8:30 日本山妙法寺⇒デヴィズ・ホール⇒ABC ホテル(休憩と荷物整理)⇒ポカラ空港 17:20⇒18:00 カトマンズ・トリブーバン空港⇒18:30 タメール FUJI ホテル

ガイドのパワンさんの案内で、日本山妙法寺に8時半着。451段の階段。仏舍利塔へは靴を脱いであがる。登り切ると絶景。その後に、町中にあるデヴィズ・ホール見学。

午後2時、パワンさんに空港まで送ってもらう。飛行機は遅れ、離陸はPM5:20、カトマンズ到着はPM6:00。空港にはラクパさんの奥さんドルマさんが迎えにきてくれた。夕食をどこで食べようかと探していたところ、5年前に市川さんが知り合った日本人女性オーナー（実家が八王子みなみ野の女性でネパール人の男性と結婚しアクセサリー店を営む）が店にいたので、挨拶をしてネパール料理店を教えてもらった。

※日本山妙法寺

フェワ湖南岸の1113mの丘に建つお寺（世界平和塔）。日蓮宗系の日本人によって建てられた。フェワ湖とアンナプルナ山系のヒマラヤが一望できるビューポイント。



アンナプルナ連山を背に ポカラの日本山妙法寺より

### 以下、私の記録

(マルディヒマールに行かず、ガンドルンからバンディプール、チトワン、カトマンズ)

10月26日(水) ガンドルンからバスでポカラ経由、バンディプールへ

8:40 ガンドルン (1951m) からバスでポカラに向かい出発。穴ぼこの多い道を揺られ3時間強でポカラ着12時過ぎ。500ルピー。バスの乗り換えのために、わざわざ300ルピー払ってタクシーで7-8分乗りプリティビチョーク12:10着。ポカラ付近でティハールの踊りが時々見られた。カトマンズ方面行き13時過ぎ発のバスでプリティビハイウェイ (大変なでこぼこ道) を2時間、ドゥムレ着15:40、500ルピー。



アンナプルナサウス 7219m、ヒウンチュリ 6441m、マチャプチャレ 6993mを仰ぐグルン族のガンドルン村

ハイウェイというが道は不整備で渋滞もあり、とても疲れる。込み合うバス車内で前の席の母子の女の子は小学5年生で、英語で教える Private schooled で勉強しているという。英語で全教科教えられるが先生は1人を除きネパール人という。ネパールでは英語で滑らかにどんな教科でも教えられる先生がたくさんいるのだ。そして父親がカタールで働いているそうだ。今からゴルカの故郷に帰るそうで夕方には踊りに参加すると楽しそうに話す。ドゥムレから乗合タクシーで20分ほど登ってバンディプール着。昔はマガール族の農村だった。18世紀にゴルカ王がカトマンズ盆地を

占領し、難を逃れて来たバクタプールのネワールの人々によってバザールが造られたそうだ。昔はインドとチベットの交易の要衝だった町で、古きバザールの街並みが残る。今はハイウェイが下にできて往来がすっかりなくなったようだ。

ティハールの祭りで明日バイティカ（姉妹が兄弟に自宅でティカの儀式をする）があり、ほとんどの国民が家に帰るので、タクシー代は高いぞと言われ、通常の3倍取られた。Himichuli Guest Homeに着く。外国人観光客が多く泊まると言う。1泊朝食付で2000円程。なかなかいい部屋だ。バンディプールからの絶景、大パノラマを心待ちにしていたが、残念ながら空は霞んで見えるはずのヒマラヤ連峰は全く見えなかった。昨日はよく見えたのにといい。

ホテル前の石畳みにティハールの飾りが描かれていた。夕方になりバザールを見に出かけた。観光地だけあり外国人が多い。



標高 1,000m の丘の町、バンディプールでのティハールの踊り

標高約 1,00m の山の上なのに平らになっていて広い石畳のお洒落な古都のようにホテルや食堂が200m程も立ち並ぶ。道の突き当りに寺院がある。さっそく音楽が聴こえ、ガンドル同様に着飾った女性と若者の2グループが踊りを外国人が多い店の前で披露している。主に外国人観光客のお布施？をもらっている。村や街の道路修理などに使うそうだ。踊り手はなかなかの笑顔で、仲間達は合いの手を入れたり、エールを叫んだり、一曲終わるたびに大喝采。最後の曲では踊り手が見物客を誘って大勢で盛り上がる。私も一番踊りが見えるテーブルに座り、眺めていると、笑顔の踊り手に突然手を引っ張られて踊りの中に入った。

ただどのレストランもネパールの定番料理ばかりのようで、またこのバザールにはネパールのお酒、チャン、ロキシが置いてなく残念。山の上に家々が四方に伸びている。家々の前の石畳にティハールの祭礼の様子が描かれていた。

村の方がティハール祭は楽しいと言うのは、姉妹が兄弟に祝いの儀式をネパール中でやり家族が集まり親睦を深めるような機会がよくあるためかとも思う。夜9時で私は早めに退散した。

10月27日(木) バンディプールからチトワンへ

朝も晴れているが、ヒマラヤは霞みがかかって何も見えない。バンディプールは何人も人がいいよと勧めてくれていたが、霞がなければ、マナスルもアンナプルナもよく見えるそうだ。

10:45 乗合タクシーに乗り、ドゥムレへ、1,000円程。ネパールの年金、若者が買うバイクの値

段、等の話を車内です。バスでムグリンへ。12:10着。乗り換え時、トイレ探しに苦労した。4,5軒の店に聞いても、みんなあちらの方にある、とだけ答えるのだ。日本のように長距離バス乗換所に綺麗な立派なトイレなどないのだ。

バイティカで人々は自宅に帰るので、バスも少なく、人の出もまばら。雄大なナラヤ二川の溪谷を見ながら 13:40 チトワン着。

片道4車線もあるかと思われる広い道路（マヘンドラ・ハイウェイ）がチトワンの町を横断している。住宅街も区画されていて道も広く、カトマンズと違うことに驚く。この広い道路沿いのホテルの前あたりは、日本語、韓国語の学校やオーストラリア、カナダ、UK等へ留学斡旋する業者の目立つ看板があふれ、カトマンズに負けない盛況ぶりだ。大きな映画館もあり、ショッピングモール？も観られ、豊かになってきている様子がかがわれる。



チトワンの大通り。日本語学校の先生マダンさん

イギリスで働き家族で住んでいたが、父親の介護のために単身帰国した男性

エンピさんは、八王子の大学で学んだあと、東京で外国人の人材紹介部門を会社で興し、そして独立している。そのユニバード社の子会社がチトワンにあり、日本語学校も運営しており、今回私は訪問した。チトワンのユニバード社の代表者、クリシュナさんは、2年前からイギリスからネパールに戻り、日本や、豪州、英国などに留学、就職の斡旋をしている。15年間イギリスで会計の仕事をしてきたが、学校で学ぶ子供と奥さんを残して帰国した。一人帰国した理由は父親が痺れなど半身不随で世話をしないといけなくなったからだそうだ。ネパールでは健康保険、介護などの社会保障が不十分で息子が直接世話をする必要があったようだ。

10月28日(金) マウルカリカの山のお寺へ

日本語教師のマダンさんに朝7時にホテルに来てもらい三輪タクシー・トゥクトゥクでマウルカリカの山のお寺に行った。チトワンの主要道路があまりに広いので驚く。また人が住む住宅街も家々は大きく道も区画が整理されていて住みやすそうだ。カトマンズの無計画さととても違う。日本人にも羨ましい地域ではあった。途中、川幅が500mほどもあり水をたたえたナラヤニ河を渡る。観光船も走りお客でにぎやかだ。川を渡ったところにイギリスのオックスフォード大学があったが、卒業後はネパールで就職とのことだ。お寺の見え方もカトマンズあたりと全く異なる。マウルカリカの山登りに1時間以上かかった。まさかヒマラヤのトレッキングの後にこんなに山登りのお寺観

光になるとは思ってもいなかった。途中、茶屋がありネパールの煮豆と野菜のミックスを食べて休んだ。頂上の寺院で3人（一人は寺のゲート前で落ち合った日本語生徒）裸足になって厳かに花を供えてお祈りした。カトマンズにはない感じのお寺だ。沢山の人がお祈りに来ていて皆1時間以上歩いて登って来たのに驚く。

頂上のお寺から眼下に大きな河が山から蛇行して下るところに老人ホームがあると聞いた。ネパールにもそういうものがあるのだなと思った。下りに何匹も猿がいた。下って山の入口前にある店に入ると店の主人が、弟が日本で働いていると言う。なかなかこの地域でも日本とのつながりが強いのかと思う。マダンさんと二人で三輪のトゥクトゥクで15分ほどでチトワンに帰る。



マウルカリカ山の途中にあった店 マウルカリカ山頂上のお寺

#### チトワンの日本語教師マダンさん

マダンさんは日本語を一生懸命に教えていて、授業は1回2時間休みなく教えるという。29歳。なかなか肌の色が黒い。近所の国立トリブバン大で経営を学び、就職先にいいところがなく、日本語教師をしながら3時間睡眠でN2合格と日本行きを目指している。妹と弟が福岡にいて、介護と自動車整備の専門学校で学び就職まじかと言う。本人も行きたいが2回も沖縄の日本語学校入学を申請したが、入国を拒否されてしまったそうだ。拒否理由は、親の銀行残高が200万円強に対し、年間授業料が90万円位で、仕送りが十分できる状況ではない、と判断されたようだ。弟妹は日本入国受理されているのだが。理由が何であれ一度日本入国が拒否されると再度の挑戦は難しいのが現状だ。

母親に、酒とタバコはやらないと宣言してから一切禁酒、禁煙という。彼の母親は、昔ながらのヒンズー教の戒律である毎週1日断食を今もちゃんとやっているという。マダンさんは、土曜日以外は、朝7時から午後4時まで日本語を教えている。親は、もう年だから結婚を、と言うが、どうしても日本に行きたいとのことだった。

#### インド留学したミスラさん

マダンさんと一緒にマウルカリカ山のお寺に登ったミスラさんは、インドのデリー大学で経営を学び、チトワンで会社員として企業の査察の仕事を三年したが、月給2.5万円でボーナスなし、見合わないと、辞めて、日本で働くため、日本語を学んでいる。本当に優秀な若者が国内でよい仕事が無く、外国に仕事を求めて出て行くのが現状だ。もったいないことだ。マダンさんの話では、銀

行、公務員などに就職するには、親戚など身内がないとできない、とのこと。



マウリカルカ山

チトワンに戻り、一休みしてユニバードの日本語学校を訪れた。ティハールの祭りの時期なので生徒はいなく、学校を見るだけだった。マダンさんは日本語授業を2時間のクラスを休みなしでしっかり教えると言う。生徒には授業が大変で、苦しくなって薬を飲ませてやることもあるそうだ。

夕方、マダンさんの家に招待していただいた。家庭の事情もあるのか平屋建ての小さな家だ。周りは立派なつくりの家が多いが。私は食事前にフルーツでネパールのレッスンフィリリや国家、そして日本の曲を演奏して聞いてもらった。

#### マダンさん一家の外国で働いた経験

日本語教師マダンさん一家の話聞いた。マダンさんの母親はイギリス生まれで、それは母の父親がゴルカ兵でイギリスにいたからという。マダンさんの父は、54歳位だが自動車整備の仕事で引退している。自動車整備の学校は出ていない、一般にそうであるように。以前にバーレーンで14年間、警備の仕事をしてきた。月給10万円ほどで、1日12時間、毎週休暇なしで働いたそうだ。

マダンさんは4人兄弟で、姉は、親の近くに5歳の娘と住み、旦那さんは、大学院出たのにサウジアラビアで3年前から運転手をしている。その前にマレーシアで10年ほど働いたそうだ。マダンさんの妹と弟は福岡にいて、来春就職予定だそうだ。妹は介護の学校、弟は自動車整備の学校の2年生で学んでいるという。

夕食後にマダンさん宅から数分歩いた路上の住宅の前でティハールの踊りに出かけた。近所の人々が10人ほど集まり、マーダルの太鼓など数種類の楽器の演奏で4-5人のおばちゃんたちが踊り始めた。そしておばちゃんたちに誘われ、今晚で3日連続の踊りとなった。外国人の私が踊りに参加すると盛り上がってくれる。素朴で飾らない気軽な踊りが楽しくていい。ディスコ的に見よう、見まねで手足を動かしていればOKだ。日本の盆踊りのように決まった場所に村中が集まって、という踊りでなく、街のどこでも集まって気軽に踊り演奏する、歌う、という誰もが気軽に参加する雰囲気のものだ。顔中に真っ赤な粉を塗られ、黄色の花輪をかけられた。日本語の先生マダンさんと沢山話しながら20分ほど夜道を歩いてホテルに戻った。途中、結婚式の写真などの店があった。幸せそうな結婚式のカップルの華やかな写真が飾られていて楽しい。



チトワンでのティハールの踊り

10月29日(土) チトワン ソウラハ自然公園で象やワニを見る

マダンさんが、ソウラハの自然公園を案内してくれた。チトワン国立公園は、東西 80 km、南北 23 km という広大な野生動物保護区で、ユネスコの世界遺産に指定されている。チトワンからバスで 20 分ほどで着いた。ソウラハは外国人の人気スポットでホテルがたくさんあり、観光ガイドの店を多い。残念ながら予約がないと、当日では園内には入れないと言われ、ガイドさんに連れられ水田地帯が広がる周辺の村々のサイクリングツアーに出かけた。インドと国境を接する南の熱い平野部でカトマンズや山の村とは生活の様子がずいぶんと異なる。



川に自然のワニが何匹も見えた

そしてサファリ公園の外側の一部なら入れるということで、象、サイ、ワニ（大河に生息）などを見て歩いた。ソウラハの町では、象が背中に観光客を乗せてのっしのっしと歩いて廻っていた。中心地では夕方、ティハールの祭りの時期で、路上で踊りのグループが踊っていて目を楽しませてくれた。夕暮れ時にラプティ川の美しい河原でくつろぐ。

夜のタライ地域のタルー族の踊りのショーには、カトマンズ等からのネパール人観光客が 95% で、ネパール人もこんなにお金を使って旅行するようになったことに驚いた。踊りも衣装もカトマンズや山間部とはとても異なり、これは自分の知っているネパールとは違うと思うほどで驚く。



10月30日(日)

カトマンズに行くのに渋滞に会わないように早朝6時前にバスに乗る。トレッキングの荷物も担いで20分ほど歩き、朝霧で薄暗い中、バスで出発する。バスは満員。車掌と客たちが運賃で大喧嘩して、結局本来700ルピー(770円位)のところ事前連絡ミスということで600ルピーになった。車掌は一人ひとり札の現金を集めていた。私のトレッキングザックが通路に置くと邪魔ということをさんざん言う客がいて、途中バスの屋根の上の荷物置き場に登りしぼりつけてもらった。カトマンズに近くなったころ、横から飛び出してきた車とぶつかりそうになり、喧嘩の様相に。朝早く出たので渋滞もなく10:35カトマンズに着く。下りてからタクシーでタメールのホテルまで440ルピーもかかる。

カトマンズ ホテルオーナーの話：従業員の高給要望

Pension Vasana ホテルに宿を取った。コロナ前にこのホテルで日本のお茶会が企画され、日本から大勢が着物とお茶道具を持参して開催された。こちらのホテルオーナー一家のサハジさんは30歳ほどで、親が立派な実業家でもあり、9歳からインドのラジャスタンの英語の寄宿学校に入り、高卒後に大分の立命館アジア太平洋大学で学んだ。曙ブレーキ?で10年ほどいた後、ネパールで親の事業を手伝うことに。JICAがバサナホテルをよく使っていたそう。ネパール人の日本留学、就労にも興味を持っている。

以下、サハジさんの話。

「現在ではネパールの皆様仕事をしに海外行く人がほとんどですね。海外だと頑張れば給料高く貰えるし、ネパールでは高い給料をもらうには、銀行などの経験や優秀な大学院でてないといけません。ネパールでは今働く人も少ないし、仕事も少なくて大変な時期です。」

「コロナの数年間で外国人観光客がなくなり、カトマンズでたくさんのホテルが営業を止めた。今は国内のネパール人のお客が増えていて、宿泊だけでなく会議、パーティーもある。日本からたくさん来てほしいのだが。父親は銀行業などに注力していて、自分はホテル業を立て直したいが大変だ。」

「コロナ前には、ホテルで最低賃金の月給1.5万円で働く人もいたが、コロナで沢山辞めてオーストラリアなど外国に高い賃金を求めて行ってしまった。今、採用しようとする4万円要求してくる。まだまだ外国人観光客は戻って来ていない。」

大学4年の仲間40人が7日間でランタンを楽しくトレッキング：

・ホテルで働く女子大生の話では、去年大学4年の仲間40人で7日間楽しくトレッキングしたそう。親のお金で、ただ若いのでガイドもポーターもなしで。我々がしっかり山の準備をし、ガイド、ポーターを何人も連れて費用をかけて一生にせいぜい1, 2度のつもりの山行とはずいぶん違う感じで気軽にトレッキングに出かけている。なおトレッキング宿の宿泊・食費はネパール人は外国人の半分か4分の1位で済む。聖地マナカマナのロープウェイも外国人は2倍だ。

HONDA がネパールに組み立て工場建設というニュース：

・HONDA がネパールに組み立て工場を設立する契約ができたという新聞記事があった。ネパール経済は、日本よりは上向きだから高級車の補修など、従来の修理工場では対応できない技術や部品が必要となるだろう、と言う人も。工場建設という話があっては立ち消え、ということがよくあるそうだが。隣国インドで日本のスズキがシェア 50%ほどもあり大きな投資をしているが、ネパールでは外国企業の投資がわずかだ。国別の投資で、中国が50%、インドが25%位で、アメリカ、韓国などにも大きく差をつけられて日本はわずか0.9%ほどだ。

聞いた話では日本政府は政権が不安定な国には投資はしない、とか。昔2-30年ほど前までは国王時代で、日本の投資が大きかったが。バングラデッシュは皮細工など製造で器用であると評価されているそうだが、ネパールはそうではないと。またインドより、ネパールの方が人件費が高いとも聞いた。インフラ面でもネパールで停電が1日10時間以上あった頃から10年もたっていない。



カトマンズ タメールの寺院

15:00 フロリダで留学、勤務のパダムの息子さんと会う。

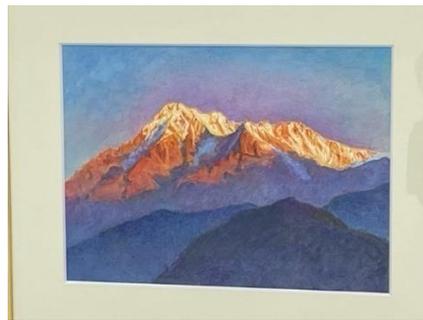
40年前の協力隊時代にカウンターパートだったパダム・プラサッド・シュレスタさんと息子さんがわざわざバスに40分以上乗ってホテルに会いに来てくれた。明日にはアメリカに帰るためと言う。パダムさんの長女はイスラエルに15年介護の仕事に行っていて帰国し、6月に会っている。

今回会った末の息子さんは40年前はまだ生まれていなかったそう。彼は運良く高卒後フロリダの大学に留学できる奨学生に選ばれ、会計学を学びフロリダで会計の仕事をしているとのこと。将来を考えてITの勉強をオンラインで受けているそうで、ITを仕事にしたいと考えているそう。ITは草の根レベルでは、アメリカより日本が進んでいると思っているそうで、日本に行きたい

という。アメリカは、高学歴の人と低レベルの労働者との賃金格差がありすぎるという。ネパールの奥さんも来年位からアメリカで看護師の資格を取って働く予定とのこと（アメリカで資格を取るの簡単ではない）。

ネパールのダサイン、ティハールの祭に合わせ1ヶ月ネパールにいたが、半分仕事もPCです。約束なので大変、とのことだった。ついでに私がフロリダに繰れば歓迎する、あちこち案内しますとも。親を来年アメリカに招待したいと言っていた（そして本当に2023年6月から半年ほどパダムさん夫婦は生まれた孫の世話を半年アメリカに行くことになった。パダムさんは私に電話してきて、私も一緒に来てくれれば楽しいのに、と言ってくれた）。

なお、パダムさんの長男は40年前は生まれてまだ1年位だったが、大学院でEngineerを学び、今はネパールの山間部の水力発電の仕事をしていて出張中という。水力発電はネパールの貴重な輸出産業だ。立派な二人の息子さん、娘さんがいて幸せそうだ。



18:00 トーラン・カルキさん宅を急遽訪問。医療界の重鎮の息子。

ボジプールで柑橘の仕事と一緒にやったトーランカルキさんが今日なら会えるというので急遽スダルシャンさんにバイクで走ってもらい、会いに行った。トーランさんは、ボジプールに選挙の応援に行っている予定だったが、体調が悪くなり出発を延期していてそのおかげで会えることになった。彼はなかなか弁舌滑らかで国や地域の政治社会にしっかり意見を持っている。次女のChhabuさんは、夫がアメリカで韓国の携帯会社で働いているが、子供がずっとできなく、長年経てやっとできたそうで、みんながとっても嬉しがってそれで名前をクッシー（うれしい、という意味）と付けたそうだ。彼女は私に数時間だけでなく何日かいてゆっくり過ごしましょう、と言ってくれた。

トーランさんの4人目の子のロッチャンさんはネパール医療界のトップのような医師だ。トーランさんは父親なのにできのいい息子をドクターと呼ぶ。18年前にちょうど彼の結婚式にかみさんと参加することができた。今回はすっかり偉くなって忙しい中、家で少し話げできた。毎年2、3の外国に出張に行き20数か国には行っているそうだ。日本にも行っていて、日本が一番いい、と言っていた。どういう点だろう。日本人が長生きするのは遺伝子が違うのだろうか、等と言っていた。ロッチャンさんの奥さんは見合い結婚のようだが、歯医者さんだ。私の歯の治療状況に興味を示していた。

トーランさんには、ヨガの同士、心の友とも彼に言われ、恐縮しながら、ロッチャンさんが私にビールを出してやれと言ってくれて、有難く大瓶1本いただいた。沢山話して、沢山の家族にも会

えて、ご馳走になった。映画を 100 本作った長女のスシャルマさんには時間が合わず会えなかった。彼女は選挙に立候補していたようだ。大きな犬にさんざん吠えられて、トーランさん宅を後にし、寒い風にあたりながらスダルシャンさんのバイクの後ろに乗せてもらいホテルに帰った。

10月31日(月) Akshala 日本語学校訪問、散髪、服の修繕、買い物

10:00 スダルシャンさんがホテルに会いに来てくれる。弁護士だがいつも私をバイクに乗せてあちこち連れ行ってくれたり、世話してくれる。4年ほど前に八王子で、ストリートチルドレンの学校の話をしてくれた方だ。

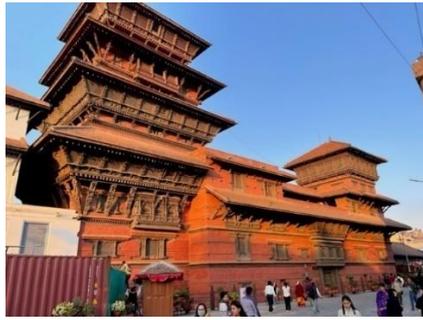
11:00 Akshala 日本語学校のギリ社長に会いに行く。日本語学校の教室で少し話をさせてもらった。一人の生徒は 30 歳過ぎているが日本で 3 年ほどコンビニのおにぎり作り等の仕事をしていて、ビザが切れ帰国したが、また日本に行きたいと日本語を学んでいた。日本語レベルも低く、彼の人生が心配になる。ギリ社長の奥さんも日本で会っている（蔵前国技館で相撲の練習風景を共に観覧）が、今は Akshala 社でギリさんの事務などサポートもしている。小さな娘さんは会社名と同じ Akshala という名で、妹さんが昼間世話をしてくれているそうだ。ギリ社長にお昼をごちそうになった。



バサンプール広場からハヌマンドカ（旧王宮）

16:00 スダルシャンさんにバイクでニューロードに散髪、服の修繕、買い物に連れて行ってもらった。

- ・ 200 ルピー 15 分ほどで散髪。荒っぽいマッサージはグー。
- ・ トレッキングで襟がボロボロになったシャツを 40 分で安く（数百ルピー？）直してもらえた。カトマンズでの日本品、韓国、中国品。
- ・ PC の電源コードを日本から忘れてきたがなんとか買えた。日本の NEC の PC に合う US 製のものだ。日本製の PC、携帯はなく、日本のパソコンを日本から持ってくると日本製品の販売がほぼないので部品交換や修理などが大変だ。携帯はサムスン、オッポと i-phone、PC は中国、米国製ばかりだ。



マヘンドラ博物館

20:30 カー ज्या食堂（ご飯のダルバート・タルカリの食事がない）で Fried rice, モーモ（餃子）、ビール 750 ルピー。まさに庶民の食堂だが、少し主人やお客とおしゃべりして楽しむ。

11月1日(火) トリブーバン大学訪問

11:00 トリブーバン大学ビソバサ Campus 日本語教師の坂本みどり先生をサハジさんと訪問。2時間半話す。去年 N1 合格者が6人出ている。コロナでリモート授業を坂本先生が日本からしていたのに。ある本? が刺激になって日本語学科の学生が競争するように勉強するようになったと言う。卒業生から何人か私も関わった金沢の介護専門学校、新潟の自動車整備の短大に入っている。みどり先生は40代後半から25年ほどもまさしく無償で日本語を教えていられる奇特な方だ。

カトマンズの食堂の閉店時間

・外国人観光客向けのタメルでないサハジさんのホテルの近くで、夕方9時半にやっと腹が減って外に食べに行ったら、食堂はみんな9時でこの辺は閉まったそうで、酒屋と駄菓子屋（豆菓子など）で買って帰った。また夕方でもネパールの主食のごはんのダルバートタルカリの店がなかなかなく、軽食の店（モーモという餃子など）ばかりだった。お酒を売る店でネパールのローカル酒のロキシ、チャンを売ってなく、ビール、ワイン、ラムなど洋風のものばかり。なんと韓国の San Soju という酒がビニールの小瓶であり、多分ネパールで製造と言っていたが、ネパールで詰め替えているようだ。

11月2日(水) バネパの Hachiko 日本語学校、カトマンズ大訪問。

7:30 Hachiko 日本語学校のアシス校長がホテルにバイクで迎えに来てくれバネパに向かう。

8:30 バネパの日本語学校 Hachiko に着く。なかなか渋滞で道も悪かった。

アシス校長から1時間ほど時間をいただき、18人ほどの生徒にネパール語で私から協力隊時代の話などし、それから日本についてなどいろいろ質問に答えた。生徒さんたちは日本に具体的に興味を持ってくれたようだった。一人のかわいい25歳の女性は受付業務もやっていて、なんと先日、私立学校の英語の先生を辞めて日本で学び働くためにこの日本語学校に入ったという。大学で英語教授法を学んでせっかく英語の先生になったのに。ひとつには給与が2万円ほどしかないそうだ

が。ちなみに公立学校の先生の給与は少し良くて月給3万円ほどだそう。



はちこ日本語学校の生徒たちと



親の病気で日本行きを断念した生徒に花束をいただいた。



カレーの香辛料の店。バネバには、日本と交流のあるヒカリ幼稚園、そして美しい寺院がある。

12:00 頃、バネバのカトマンズ大（工学部）をアシスさんと訪れ、日本語クラスの先生をしているア卡斯・ラマさんに会う。実は彼はトリブーバン大で坂本先生から日本語を学んでいて最近日本語検定N1の最高レベルに合格している。その後、AKASHさんは、ネパールにしながら金沢の介護の専門学校にオンライン面接で合格し、2023年4月から入学することとなった。卒業後の5年間関連施設で介護の仕事をやることを条件に授業料は無料となる。

カトマンズ大の日本語クラスは目的がはっきりしていなく、レベルも低く、改善が必要なようだ。

15:00 カトマンズ大のビム教授にカトマンズの Ambassador ホテルでアシスさんと会う。ビムさんは昔、福岡など日本に9年間いて日本語が堪能。アジア開発銀行にも1年いて大きな開発プロジェクトに携わっていたそう。風邪気味になり、アシスさんに風邪薬を買ってきてもらう。



11月3日(木) パダムさんのご自宅訪問。(協力隊で柑橘栽培カウンターパート)

40年前の協力隊時代に柑橘栽培指導でカウンターパートだった Padam Prasad Shresta さんが迎えに来てくれて、バスに乗り彼の自宅に向かう。まさしく 40 年ぶりに彼の奥さんのリタさんと再会する。リタさんはインドからネパールに来たという。私にチャンを作ってくれ飲ませていただいた。そして家族に会い、食事をいただいた。当時 6 歳くらいで結婚して娘が生まれてから 15 年間イスラエルに出稼ぎに単身行ったニマさんにも。そして彼女の夫と娘も。

若かった奥さんのリタさんも 67 になり、パダムさんも 74 になり、子供たちもアメリカで活躍したり、水力発電の仕事をしたり、イスラエルで 15 年介護の仕事をしたり、立派になっている。パダムさんは公務員で給料が 2 万円くらいだったのに、どうやって、家を 3 つ持てたか聞くと、子供たちが海外から仕送りしたり、一度買った土地を売ったりして、苦労して建てた、とのこと。奥さんが歌を色々歌ってくれた。山の暮らしの方が家畜の世話や畑仕事があって楽しかったのに、と言う。



郊外の 4 階建ての大きな家

カトマンズでは、地震後のお寺の修復が大分進んでいる。また道路にゴミを捨てる罰金の制度ができて綺麗になったようだ。

11月4日(金) キルティプールのサランギ奏者 Prince さん、プージャさん宅訪問。

Prabhu 銀行で両替した。スダルシャンさんの奥さんが勤務している銀行で、彼が正式な銀行で両替した方がレートがいいだろう、と言うので行ったがいろいろな書類が必要で、とても時間がかかった。レートも外国人観光客が多い、タメール地区の方がよく、また両替はとても簡単なので驚く。

12:00 Kirthipur のサランギ奏者 Prince さんをスダルシャンさんのバイクで訪問する。ニマさん夫婦もバイクで来てくれた。私のフルートと一緒に、日本の「さくら」を演奏する。またネパールの曲を演奏してくれた。とてもきれいな音色だ。ただ私が試しに引くととても難しくいい音が出ない。親子 4 代でサランギをやっているそうで、父親はアメリカの大学に教えに短期に行っていると言う。Prince さんもアジア、日本など 1 か国で演奏している。2023 年春にはメルボルンでも。私はつい、サランギの楽器を 4 万円で買ってしまった。爪で弦を押さえる一刀彫の弦楽器だ。



Prince さん



サランギ



Prince さんから弾き方を習った



Pooja さん宅の近所の一杯飲み屋？



キルティプールの町中の寺院

18:00 Kirthipur の Pooja さん宅を訪問。Pooja さんは夕方 6 時まで銀行の仕事だった。お姉さんは東京・荻窪のネパール人向けエベレストインターナショナルスクールでネパールの踊りを教えている。新築の家に入らせてもらう。奥さんの Pooja さんは宗教上の断食日であったが、私には夕食を作って出してくれた。そして帰宅するとすぐに部屋の中に何か所か、外にも何か所か蠟燭の灯りと供え物や花で飾り、祈りの儀式を最初にやっていた。写真は撮らないことと言われる。この Kirthipur の土地は 4 年で 2 倍に高騰した。木材も高騰し、床や壁に十分使えなかったと言う。一人息子が音楽、文学に興味があって、あまり将来の稼ぎにつながる仕事につきにくいと親は心配している。息子さんはギターを弾き、Yu-Tube で日本の最近の歌を少し知っていた。夕方 7 時半頃、息子さんがアプリでタクシーを呼んでくれ、ホテルまで手頃価格で帰れた。



Pooja (祈り)さんと一人息子



新築の家

土地 50 坪ほど 1500 万円 (庭なし。親の土地)、家 1500 万円 (4 階建て。共稼ぎで購入)



キルティプールの Pooja さんの家の前。稲刈り風景 (夕方 6 時)

11月5日(土) 中高生音楽グループと交流。ブダニールカクタ見学。日本映画会参加。

10:00 MusicArt Society (Budhanilkantha-9, Mandikhatar) を訪問した。30人ほどの中学、高校生たちの音楽グループで外国か寄贈のバイオリン、電子ピアノ、ギター、及びネパールの楽器とで楽団を作って演奏している。ネパールの有名な曲を演奏してもらった。曲名は以下、

- (1) Kalilo Tamalai : folk song
- (2) Jhamke Phuli : folk song
- (3) Beniko Bazar : west Nepal song
- (4) Resham firiri
- (5) Changba hoi Changba (Song of Himalaya's people) (Tamang Selo)

- (6) そして私は、ネパール曲 (Resham firiri、国家)、日本の山口百恵の秋桜、神田川、モーツァルトの大曲、白鳥の湖の序曲、など吹いて聴いてもらった。

平日学校が終わってからと土曜の休みに集まって練習している。先生は高校で音楽を教えている Sumit Pokhrel さんが指導している。西洋音楽は独学で学んだ? とか。5年前にも訪問している。



MusicArt Society の生徒たち

ブダニールカンタ：

それから近くのリングロード沿いのローカル食堂で食事をし、カトマンズから北へ 5 km の Budhanilkantha の寺院を見物しにタクシーで行った。祭りの日で混雑していた。寺の休憩所のようなところで、ハーモニアンで歌っている女性がいた。海に浮かび聖なる蛇の上で瞑想するビシュヌ神、5m の神像が横たわる。7-8 世紀の作という。



夕方 5 時から Budhanilkantha のリングロード沿いの店で、日本人が作った映画、「原発、それ本当」をネパール在住日本人たちと、興味のあるネパール人たちと見た。踊り研究家の岡本有子さんが通訳。後、会食。

11月6日(日) キルティプール、パタン観光。シタール演奏会。

アシスさん（長谷川友人、バネパで日本語学校を運営）のお兄さん、スンダル・ラマさんが 6, 7, 8 日の 3 日間運転と案内をしてくれる。スンダルさんは、トレッキングガイドを 10 年以上してきて今まで一人も高山病にさせたことがないそうだ。日本語もできラマ僧の父からチベット仏教を 10 歳くらいで学んだこともあって寺院や歴史の説明が詳しい。5 人で 25,000 ルピー（アシスさん

の特別な計らいで通常の半額以下：約 5,600 円/人)。

6日のパタン、キルティプールはジュニタさんが同行し、日本語で案内してくれた。ジュニタさんは日本の大学の工学部を卒業し日本で CAD による設計の仕事をして日本在住 10 年ほど。日本人男性と結婚して帰国。案内のお礼に 30 ドル支払った。(一人 900 ルピー)

8:00 FUJI ホテル出発。カトマンズの南西へ 5 km ほどのキルティプールへ。入場料数百ルピー。以前は無料だったが。丘の上の荘厳なバグ・バイラブ寺院、中にはヒンズー教徒以外は入れない。丘の上からカトマンズの街が見下ろせ、スワヤンブナートの山も霞んで見える。寺院前を音楽を奏でた行列が何か担いでゆくので尋ねてみると、死んだ人を送る葬式とのこと。そして続いて高さ 10m の仏塔ストウーパのあるチランチョ・ビハールを見学する。



バグ・バイラブ寺院：カトマンズの町が見渡せる。



チランチョ・ビハール

キルティプールに昔、ゴルカから戦士たちが襲ってきて男は花をそぎ落とし、女は強姦し、キルティプールが支配された。そんな恨みが残っているようだ。

続いてパタン。入場料が 1,000 ルピー (約 1,100 円) も。道路が渋滞してやっと着く。

クマリの館の生き神様のクマリに会いに行った。クマリはシャキヤ族など決まった種族の出身で、真っ暗の怖い部屋に入れられても泣かない子が選ばれるということだ(カトマンズ盆地にカトマンズ、パタン、バクタプールの 3 つの古都がありそれぞれ基準も微妙に違うようだ)。初潮があると交代となる。普段は両親など家族とクマリの館で住み、友達と会えるが、勉強も遊びも館内です。

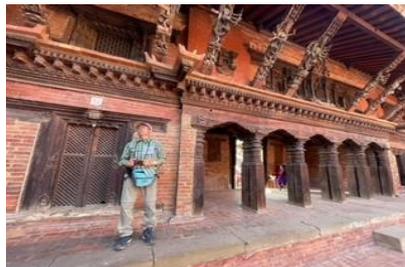


クマリの館の生き神様



クマリの館の横の寺院

我々は順番待ち後、狭い階段で2階に上がる。ひとりひとりクマリに数百ルピーをあげて、クマリから直々に額にティカという真っ赤なものを付けてもらう。



ダルワール広場にある寺院、旧王宮、パタン博物館

ダルワール広場でいくつもの寺院、旧王宮、パタン博物館を見る。美しい。ただ7年前の地震の被害が残る。

#### シタール演奏会

山の疲れも残るなか渋滞があり、やっと午後4時半にシタール奏者サテンドラさん宅に着く。ところがシタールの調律に毎回1時間かかるとのことで、しっかり待たされることに。それで話聞いて、犬がワンワン泣く中、演奏が始まる。演奏はサテンドラさんがまず一人でシタール演奏。サテンドラさんは最近、体調がよくなり十分な練習ができていなく申し訳ないとのことだが、なかなか

かの迫真の演奏。シタールの音色に聞き入る。素晴らしい。真剣な表情で演奏していた姿が印象的。シタールの曲は 13 世紀の名曲と聞いた。シタールは夜を徹しても演奏されるそう。お客さんに疲れが見える雰囲気を感じると早いテンポになって終わらせるとのこと。

そしてタブラ（小太鼓）を生徒さんと演奏し、またサテンドラさんが一人でタブラ演奏。シタールと合わせ合計 1 時間半ほどの演奏。サテンドラさんは素晴らしいタブラ奏者でもあるが、めったに両方の奏者はいないそう。そして現在、生徒に特別レッスンをしていて毎朝 4 時間、休みなく 3 か月ほどを教えている。まずはタブラで音楽のリズムを身に付けてもらい、それからシタールを教えるとのこと。生徒の人はまだ習って 3 か月なのにとっても上手になったと褒めていた。1 か月以内にシタールを教え始められるそう。サテンドラさんは、コロナ前は日米欧など世界的にシタールの演奏活動を行ってきている。そして毎日 7-8 時間の練習が必要とのことだ。すごい練習だ。

夕食は主にネワール族の料理でビール付、なかなかおいしい。演奏と夕食付きで一人 30 ドルで満喫。



シタールの演奏



生徒とタブラの演奏



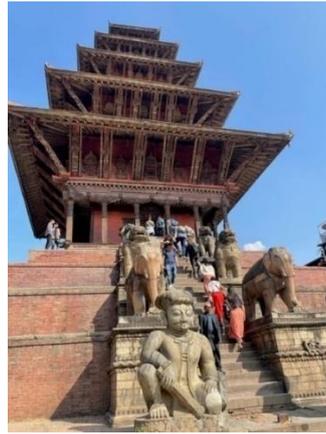
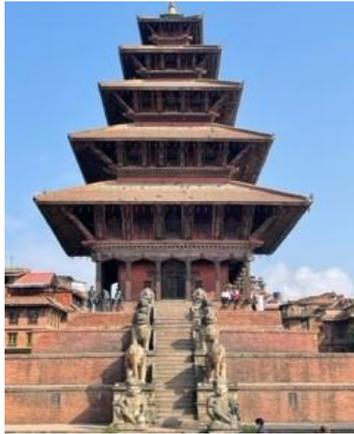
ネワール・ネパリのミックス

11月7日(月) バクタプール（カトマンズから車で 40 分。寺院の美しいネワールの古都）

バクタプールは美しい古都として誉れ高くドイツがその美しい街並みを保存するため尽力したと聞く。道路の渋滞状況と皆さんの疲労具合から、バネパ行きは取りやめ、バクタプル見学のみとした。

78 歳の門口さんはお疲れでホテルで休憩。門口さんの素晴らしさはよく寝られること。何十年ぶりで一日中よく寝た、とのこと。そんなわけで山崎さん、市川さん、吉川さん、長谷川の 4 人で出発。バクタプールの入り口付近に珍しくグランドの広い学校があったが、これは軍の子女の学校とのこと。

街の入場料を払い、街並みを楽しみながら歩くと、トウマディ広場に出る。5 段の上に 5 階建ての寺がそびえるのはニャタポラ寺院。そして荘厳なバイラブナート寺院。その前のカフェ・ニャタポラの吹き抜けの 4 階まで登り、二つの寺院を眺めながら一休み。ニャタポラ寺院に登る。11 時頃、高校生が広場を歩いて登校か下校していて、下級生は早朝クラス、上級生は昼のクラス、というように分けていると聞いた。



ウマディ広場にある5段の上に5階建てのニャタポラ寺院

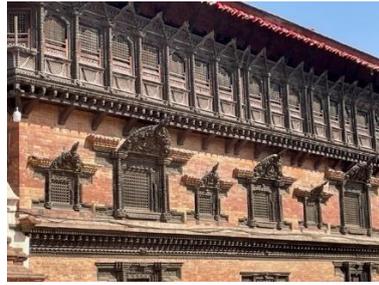


ウマディ広場にあるバイラブナート寺院

少し歩いてダルバール広場。旧王宮、博物館を見学する。



旧王宮の建物を博物館にしている



建物を飾る彫刻



戦士



通りにある寺院



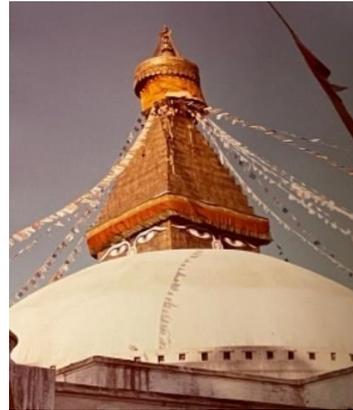
博物館の展示物

そして狭いがきれいで落ち着いた土産物屋の通りを抜ける。なかなかいい街だ。

11月8日(火) カトマンズ： スワヤンブナート。ボードナート。ダルワール広場。



スワヤンブナート



ボードナート

8:30 FUJI ホテルを出る。スンドル・ラマさんの案内で、スワヤンブナート寺院見学。町の中心地から2kmほどの小山の上。車も人も多い。正門からの上りは急な階段できついで、車でだいぶ登ってもらう。

スワヤンブナートはヒンズー教徒も来るが、祀ってあるのは仏様とのこと。猿がたくさんいて土産屋も多い中、寺院に着くと、インドの信者たちが100-200人も集まって説話に聞き入り、祈りをささげていて、ものすごく込み合っていた。カトマンズ盆地が湖であったのを人が住めるようにしたという、大日如来と文殊菩薩。大日如来は後にゴータマ・シッダルタに生まれ変わったとされているそうだ。ストゥーパを、経文の書かれたマニ車を回しながら一周した。

続いてカトマンズの東約6kmで空港の北にあるボードナートへ。世界最大級のストゥーパ。ブッダの知恵の目が四方を見渡す。チベット仏教徒の巡礼地でチベット系の人が多い。周りを土産物屋等が囲み、体の不自由な人たちが恵みを乞う姿が見られた。白いストゥーパの上から青いペンキのような液体をかけていたのはなぜだろう。

15:00~17:00 ラクパさんの案内で歩いてインドラ・チョークへ。アメ横のような賑やかな通りで、食器の専門店だけ集まった通りなど、通りごとに特徴あり。2015年の地震で市民の住む建物も壊れたままの建物、傾いた建物も多い。

ダルバール（宮廷）広場まで行ったがタレジュ寺院は周りから眺めるだけだった。2015年の大地震で壊れたお寺であった。



タレジュ寺院



ダルワール広場付近



FUJI ホテル自慢の曼荼羅。ひとりの絵師が1年間かけて作成。約50万円ほど。

出発前に、FUJI ホテルの40年来の友人のDurgaさんとご主人に、特別室でお茶に招いていただき、ご家族や協力隊、JICAとの交流などのお話を聞かせていただいた。お嬢さんは優秀でアメリカ留学で知り合ったスイス人と結婚しスイスに在住と言う。自慢の娘さん。

4人は、カトマンズ/トリブーバン国際空港 23:25 発ネパール航空 RA434 ⇒成田空港 9日 8:55 着。機内はネパール人がほとんど。高山病、コロナ、デング熱の問題もなく無事帰国できた。

11月9日(水) 日本語学校、技能実習生送り出し機関訪問。

10:00 Oxon

共同設立者のネパール人のSapkotaさん、日本人の奥様のヒカルさんに会う。Sapkotaさんの弟さんにも会えて彼は日本で3年仕事をしている。介護や建設などの技能実習での日本への送り出しは口コミでどんどんコロナ後に増えて斜め裏に5階建て新校舎もできて見せてくれた。日本人の先生が何人も泊れる設備もあり、屋上からはカトマンズ盆地が見渡せた。日本から現在7人くらいの先生がオンラインで日本語授業をやっていると言う。介護で出発が決まっている女子生徒の授業を見せていただくとなかなか活発だ。また日本でのマナーの授業でたとえばお辞儀の仕方など教えていた。日本人の女性が事務?で働いていて、聞いたところネパール人とオーストラリアで知り合い結婚してネパールに旦那の家に家族と住んでいるそうだ。旦那は中国とか海外出張が多いそうだ。



15:00 Kochi Education Consultancy

KochiはRadhikaさんが創ったばかりの日本語学校。東京で大学院を卒業し会社を興したナレスさんがRadhikaさんに頑張れば大丈夫とアドバイスしてネパールで起業した。



彼女は日本で IT を学び仕事について半年でネパール人の夫が精神的に問題になり赤ちゃんに虐待？するようになり離婚して母子家庭になって帰国した。離婚したらビザが家族帯同でだめになり、帰国せざるを得なかったそうだ。精神的にとってもつらくなり自殺まで考えたがナレスさんに助けられて一念発起し共同で創った学校だ。1年間1日も休まず働いてきたと言う。親の反対を押し切って違う種族の人と結婚したので、親は赤ちゃんの面で倒も見てくれないそうだ。カースト問題は根強い。

17:30 JLECC アルナ校長、JLECC で働く日本人女性、Akshala 社 Giri さんとパタンの「お多福」でお好み焼きなどで食事。アルナ校長に御馳走していただいた。日本人の方は同郷で高校でバレーで鍛えられたそうで、ネパール語がすごくうまく3年契約の後、ネパールの NPO に入られるとか。(先日、アルナさんが来日した時に松戸で4時間もお話しさせていただいた)

11月10日(木) バグマティ校訪問、音楽交流。日本人会に参加。

10:00 バグマティ Boarding School

Surendra Kumar Sitaula 理事長 (Founder) に挨拶する。

それから私からお願いしていた、生徒との音楽交流を行った。生徒が竹笛のバーンスリやハーモニオンで何曲か演奏し、私が何曲か日本やクラシック曲、ネパールの曲をフルートで演奏した。この学校では正式に音楽授業があるのか、音楽クラブ活動はあるのか聞いてみたいところだ。お昼に小学生たちが食事をしている食堂で、お肉とごはんの定食をいただいた。

6月の訪問では児童生徒400人の前でシタウラ理事長と踊ったり、ネパールと日本の歌をフルート演奏と歌ったりして、随分有名になっていると言われた。



15:00 サファラさんに、中心地、元アンナプルナホテルの前でスダルシャンさんと共に会った。彼女はカトマンズのスラム街で小学1-3年生を放課後ボランティアで教える活動を始めている。年金がほとんどない生活なのに毎月1.5万円ですラム街に教室を借り、毎日2時間、そして週末、学習の基本の基本を教えていられる。田舎より問題なのは、田舎は、家族親戚が周りにいる

が、ここは、田舎から単身出てきて、身寄りがいない人の集まりだからだそう。地方よりも都市のスラム街の子どもこそ救いの手が必要だと長年の教育活動でわかった、と言う。この子どもたちは学校に入っているが基礎教育ができていなく、学校の授業が分からないのだと言う。



18:00 日本人会の月例イベント（ラニポカリ近く）

夕方は日本人会の月例イベントで30人位の人が集まった。始めに不思議なインド音楽を聴いた。シタールのような深遠な楽器で、とても単調で、私には面白いと思えるような感じではなかった。日本人が演奏していた。在ネパール日本大使館の方々（文化交流関係など）、企業人、NPO関係者、ネパール人で日本と関係あるビジネス等を行っている人たちが集まっていた。アプリでバイクタクシーを呼んでもらい、15分走ってたったの150円だった。

11月11日(金) 日本語学校、民俗楽器博物館、スラム街の無料塾、トレッキング社長宅を訪問。  
8:00 Akshala 日本語学校をビノド・ギミレさんと訪問した。

今回はビノドさんの外国出稼ぎ労働者送り出し会社の登録に関係していて相談のためだった。長年関わりのあるビノドさんが、外国出稼ぎ労働者送り出し会社の登録が大変な書類等の努力と費用をかけてできたと言う。今まではこうした正式な国による承諾なしに送り出し機関は日本語学校などがやっていたそう。毎年100人以上を外国に送り出さないと登録が抹消されるとのことだ。ちょうどこの時にノルウェーから人材採用の関係会社が来ているという。日本への送り出しも長年の日本との交流から目指しており、私と共に、その辺に詳しい日本語学校を帰国を興したAkshala社のギリさんを訪ねた。日本に就業で送り出すには、日本語レベルをだいぶ上げてからにしないと受け入れる日本の企業も本人も困る、という話があった。全くそうであるが、日本の技能実習や特定技能の制度では半年の日本語学習レベルでも日本で働けることになっている。産業がないネパールでは、短期間の日本語教育で日本企業に就職させたり、日本の日本語学校に入れることで利益を得られる教育・送り出し産業が盛んである。

10:00 頃、ネパール民俗楽器博物館

カトマンズのTripureshwor Mahadev 寺院の敷地内にあり、スダルシャンさんにバイクで連れて行ってもらった。Ram Prasad Kadel氏が1995年、タンカ販売の収入を元手にして、民族楽器の収集に乗り出した。シャンカ（法螺貝）は8歳の頃に手にして以来、生活のなかに存在し続け

る楽器のひとつ。2002年には博物館として一般公開がかない、現在では655種が収蔵されるに至る。ネパールの古き良き伝統を未来へつなごうといろいろなイベントも企画する。詳細別紙参照



11:00 スラム街で1-3年の小学生を放課後教えるサファラさんの学校を訪問。

サファラさんは、年金がないのに、毎月1.5万円でスラム街に教室を借り、毎日2時間、土曜も基本の基本を教えている。学校に行けても授業が分からない子がスラム街には多いそうだ。田舎より問題なのは、田舎は、家族親戚が周りにいるが、ここは、田舎から、単身出てきて、身寄りがない人の集まりだそうだ。



12:30 和食レストラン：祭

いつもバイクであちこち連れて行ってくれたスダルシャンさんにお礼にお寿司を御馳走する。民社化前までの王様の宮殿を見下ろしながら。

17:00 母親の入院で会えなかったカルキ家の Uttam 君と Pushkar 君に会う。40年前の協力隊時代に泊めてもらっていた家族だ。Pushkar 君は国連職員、ポリスのネパール No.2 から53歳で定年退職。Uttam 君はネパールの大手高級タバコ会社（その高級ゲストハウスに泊めてもらった）と別の会社の重役だ。

17:30 トレッキング会社の社長、ラクパさんの自宅に招かれる。ラクパさんはエベレストなど数か所のヒマラヤを登頂している。ダルバートタルカリとビールをいただく。大きな部屋に日本の風呂があった。4階建てで大きい家。それからお礼を言ってタクシーで空港に送ってもらった。

ネパール民族楽器博物館設立者／ Ram Prasad Kadel ヤマハの web サイトより

[https://www.yamaha.com/ja/stories/033\\_01/](https://www.yamaha.com/ja/stories/033_01/)



ネパール出身。1992年、大学卒業後、宗教画「タンカ」の制作・販売の事業を立ち上げる。その後、民族楽器博物館の設立を構想し、1995年に楽器の収集を開始。2002年に一般公開が実現し、現在は655種、1000点以上の楽器を収蔵している。博物館の運営と併せてフェスティバルも主催。自身はシャンカ（法螺貝）を吹く。

師匠に導かれた楽器収集の旅。

ネパールでは日常生活の中に、祖先から伝わる音楽が根付いています。幼い頃からそれら音楽に親しみ、宗教画を販売する事業のかたわらで、民族楽器の収集に乗り出したのが Ram Prasad Kadel 氏です。そこには「師匠」との運命的な出会いがありました。

原体験はおばあちゃんの歌。

ネパールの子どもの最初に触れる音楽は、おじいちゃん、おばあちゃんの歌です。私の場合、3、4歳の頃、おばあちゃんが膝の上に私を載せ、よく歌を歌ってくれました。それが音楽の原体験です。楽器で親しまれているのは、シャンカと呼ばれる法螺貝です。ネパールには一家にひとつはシャンカがあり、日の出と日の入り、毎日2回お祈りするときに吹かれます。私も8歳の頃にはシャンカを吹いていました。娯楽や教育のためというよりは、日常生活に音楽が根付いている感じです。私にとって音楽は、幼い頃からたいへん身近な存在でした。

現在の生業である、ヒンドゥー教徒らにはおなじみのタンカ（布に描かれた宗教画）を販売し始めたのは1992年。これは大学卒業直後に、宗教画を描ける友人たちとともに起こした事業です。タンカのことはよく知っているつもりでしたが、仕事となるとさらなる知識が求められます。本からも勉強はしましたが、それだけでは限界があるものです。次第に、その宗教的な意義を直接教えてくれる人が必要だと考えるようになりました。

大学卒業の直後からタンカの販売をスタート。お店の壁には、たくさんのタンカが飾られている。国のためになることを。それが民族楽器の博物館のアイデアに。

ある日のこと、私にタンカの意義を教えてくれる「師匠」となる方に会いに行きます。巷でグル（導師）として知られていた人です。「あなたがグルですよ？」と尋ねると、「グルではない。

ただ、教えてほしいという人が来たら拒まないだけだ」と言います。その日から3カ月間、朝4時に師匠のもとへ通う生活を続けたところ「弟子と認める」と言ってもらえました。師匠からは、いかに心の平安を得るかを学びます。そのためにはシンプルライフ、地道に過ごすことが大事です。「自分はすごい」などと、おごってはいけません。謙虚な気持ちで穏やかな生活を送る。すると自ずと進むべき道が見えてきます。

師匠からは「何か尊いことをしなさい」といわれました。具体的にこうしなさいと命ぜられたわけではありません。私はまず、国のためになることをしようと考えました。では、国のために何をすべきか。熟慮を重ねていたところ、民族楽器の博物館のアイデアが舞い降りてきたのです。ネパールには地域ごとに100ほどの民族がいます。それぞれで音楽のスタイルが異なり、楽器もさまざま。それらは祖先が残してくれた貴重な財産です。楽器を収集・保存し、ネパールの多様な音楽文化を受け継いでいく。それは国の伝統を守ることにつながります。



ネパール民俗楽器博物館。

カトマンズの Tripureshwor Mahadev 寺院の敷地内にある。

楽器収集は、持ち主との関係づくりに始まる。

この構想を師匠に伝えると、「決して簡単なことではない」「道は険しいけれど、それでもいいのか？」と念を押されましたが、迷いはありませんでした。こうして1995年、タンカ販売の収入を元手にして、民族楽器の収集に乗り出します。はじめのステップは所有者のもとに出向き、楽器にまつわる話を聞き出すこと。その楽器にどんな歴史があるのか。作られた時期は。製作方法は。どんな人が弾いてきたか。ほかにも幅広く情報を集めます。

そもそも「どこに、どんな楽器が」あるのかという情報が向こうからやってくることは滅多にありません。可能な限り自分で調べ、自ら探し回ります。それに、どこにあるかわかったところで、よそ者の私がいきなり訪問しても、誰も相手にはしてくれません。バスでその地域に向かっても、中心地からは目的地までは自分の足で歩きます。ジープなんかで押し入ったら訝しがられますからね(笑)。誰から譲ってもらう場合もまずは関係づくりから。相手は先生。自分はいくまで生徒。そういう気持ちで教を乞います。そうすると少しずつ「仲間」と認めてくれるようになる。楽器を受け継ぐのはその先の話です。



シャンカ（法螺貝）は8歳の頃に手にして以来、生活のなかに存在し続ける楽器のひとつ。数多くの楽器を収集した今となっても、楽器に触れるよろこびを忘れることはない。

楽器へのリスペクトが詰まった博物館。

師匠に導かれるように、民族楽器の収集を始めた Ram Prasad Kadel 氏。地道な活動により、2002年には博物館として一般公開がかない、現在では655種が収蔵されるに至ります。ネパールの古き良き伝統を、未来へつなごうとする氏の思いに迫ります。

楽器にまつわるストーリーを記録するという責務。

私には楽器を収集するにあたってのポリシーがあります。今ここで使われている楽器は対象外とすることです。使われているということは、その村に必要なものだからです。譲り受ける楽器は大きく分けて2種類。ひとつは古くてボロボロであっても、修理すれば使えるもの。もうひとつは完全に一から新しく作ってくれたもの。多くの楽器は代々受け継がれてきたものですから、持ち主への敬意が欠かせません。相手に失礼のないよう、その村の歴史や文化を丹念に調べた上でコンタクトをとります。

多くの持ち主はご高齢で、彼らしか知らないことがたくさんあるものです。彼らから楽器にまつわるストーリーを伺って、なんらかの記録を残すことは、私の責務だと思っています。しかし、それをいかに引き出すのかは難題です。足しげく通い、ていねいにヒアリングを続けるうちに、向こうから「思い出したのだけど」と連絡をいただくこともありました。民族楽器にまつわる話は口承が多く、文字化されていません。基本は対面での聞き取りです。つまるところ人間関係が非常に大切となってきます。

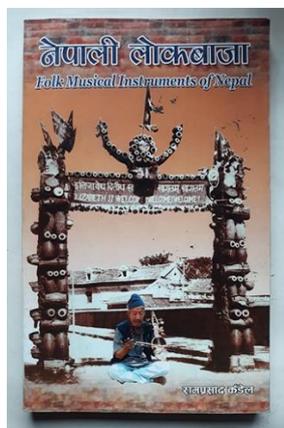


古びた Tamaura と Kathajhaal（写真左）と、新たに作られた Indra Dhol（右）。コレクションの対象となるのは「今使われている楽器」以外のもので、多くは補修すれば使えるものか、新品のものとなる。

ネパールの民族音楽全体を継承するために。

コレクションが進むにつれて、私の知識も着実に増え、視野が広がりました。たいていの楽器が、樹皮や動物の骨といった身近なところで調達できる材料だけで作られていることには感銘を受けたものです。また、ネパール各地の音楽は、地形の影響を受けていることにも驚きました。平地では、人々が動きやすく活動的だからか、ピッチが高くテンポが速い音楽が多い。丘陵地帯や山頂の村では逆です。寒さのせいもあるのでしょうか、人に寄り添ってくれるような温かくスローな音楽が多い傾向が見受けられます。

音源が残されていない楽器の音は、レコーディングする場合があります。そうすれば後々、音源を聞いた上で、実際に楽器を弾くことが容易になるからです。これも文化を継承のためには欠かせない作業です。ネパールでは1950年に新しい教育制度が始まりました。そこには良い面もありましたが、古き良き音楽文化が切り捨てられてしまう側面があったのも事実です。それを復興させたい。ただ楽器を集めておしまいではありません。ネパールの民族音楽全体を記録し、継承しようと努めているのです。



ネパールの民族楽器、375点の情報を一冊にまとめた書籍。

これも文化の継承には欠かせない仕事のうち。

音楽で、みんなを、世界を、ひとつにしたい。

2002年に博物館として一般公開を開始し、2007年に現在の場所に移転しました。1,300種を超えるとされるネパールの楽器のうち655種、1000点超が集まりましたが、まだまだ道半ばです。演奏法の分類なども進めて、博物館のクオリティをもっと向上させたい。当面の目標は、国内の楽器を網羅することです。それに目途がつけば、インド、スリランカなど南アジアまで範囲を広げたい。南アジア各国は文化や宗教に関して共通する部分が多い一方、歴史は異なっています。それらを比較すると、興味深い展示になるでしょうからね。

ちなみに、私は音楽とは人間そのものだと考えています。たとえば、手拍子も心臓の鼓動もリズムを打っていますよね。歌えばメロディになる。私たち自身が楽器のように音楽を奏でています。人間同士のコミュニケーションは、いわばアンサンブルのようなもの。人類はひとつの壮大なシンフォニーです。博物館主催で、2011年から毎年1回、ミュージシャンやダンサーを招いたフェスティバルを開催しているのも「音楽はみんなをひとつにするものだ」という思いからです。私の取り組みによって、ネパールを、南アジアを、そして世界がひとつなれば、とても幸せです。



博物館の一角に集まった次世代からの質問に応える。

ネパールの音楽文化を継承する活動は、さまざまな形で行われている。



マルディヒマール

## 2022/10/19 - 2022/11/12 ネパール・アンナプルナ方面・トレッキング費用概算

トレッキングコース：ゴレパニからガンドルン、マルディヒマール

1人当たり費用。10月中旬為替：146.5円/US\$ 程。1.1円/1.0ネパールルピー。

費目	US\$	円
航空券：ネパール航空（成田ーカトマンズ） 7月5日支払期限（山崎さんは2-3週間遅れで+2万円ほど）		176,130
外国旅行保険（保険会社、年齢による）：25日間		16,000
成田空港一片倉 往復交通費 2,130 x 2 （吉川さんは相模大野から）	-	4,260
ビザ（ネパール入国時：長谷川、4人は日本の大使館で）		6,000
ラクパさんへの支払い：トレッキング16日間(10/20 - 11/05)分 1,140\$：Trekking Package ・TIMS + ACAP（トレッキング許可証等） ・ガイドとポーター業務代・保険 ・食費・水・お茶（一定分）：日本人とガイド、ポーター ・宿代（Pokhara 1泊+Bandipur 1泊(計 34\$)含む） （長谷川は、390\$（6日間（歩きあり5日間）だけのため）） 112.2\$：交通費（カトマンズーポカラー登り口・下り口：往復） 全体 \$512 ・行き 5人：(195+122=317)/5 = 63.4 ・帰り 4人：(75+120=195) /4 = 48.75 一人当たり：4人は、63.4 + 48.8 = 112.2 （長谷川：行きの63.4\$のみ）	1,253	183,565
Fuji Hotel 宿泊：4泊（一泊当 Twin: 55\$, Triple: 68\$）朝食付き	99	14,504
シタールの夕べ：演奏と食事・ビール	30	4,395
カトマンズ盆地観光の運転・ガイド（スンドル・ラマさん）5000NRs		5,500
Junitaさん1日ガイド料（キルティプール・ポカラ）5人で30\$	6	879
<b>小計</b>	-	<b>411,233</b>
チップ：ガイドに7,500円の予定が、事情で10,000Rs. =11,000円 Porter3人に7,000円づつ。（長谷川2,700Rs：6日分のみ）		8,000
食事代：10/20ポカラ夜、11/4, 5, 6, 7, 8		14,000
飛行機代（ポカラ⇒カトマンズ：日本人）車から変更	121\$	17,726
清算：ポカラ観光。Bandipur行き中止。車から飛行機に変更 （ガイド・ポーターはバスに）：ポカラからカトマンズ		3,000
<b>合計（土産代など除く）</b>		<b>453,959</b>

\*なお、ラクパさんが歓迎会、送別会（長谷川は11/11ラクパさん宅で）をやってくれた。

## 個別費用見積：

Trekking Package 1,140\$ (167,010 円) の方が個別の合計より安かった

Trekking Package、交通費を円 (163,000 円) で支払い OK と言われたがドルで払った。

費目	\$/人	\$/全体
TIMS(Trekkers Information Management System) Registration Card	9	
Annapurna Conservation (ACAP) permit/アンナプルナ保護区入域証	27	
Service charge with government tax : \$250/person	250	
ガイド・ポーター費用 (個別費用の掛け算)		1164
Insurance staff 保険 (guide + porters) : \$45/person/17 日 (トレッキング位では不要という他社のガイドもいた)		
Guide 代(Japanese speaking): Rs.(Rupees) 2000/人/日=\$17/人/日 日本語ガイド 2 人 : 17 x 2 x 17 日 = \$531	\$17/日	
Porter 代 : 1500 NR/人 = US\$13/person : 16 日	13	
食事・宿泊代 (トレッキング中) : 外国人 4-5,000Rs.位 (宿代 : 500Rs.)		
* Trekking Package がよい点 : 全体が安価、以外 1. まとめて始めに支払うのでトレッキング中は身軽で安心 2. 食事代込みなので、毎回支払いを気にしなくて済む 3. 毎朝、各自のボトルにお湯をもらえたので歩くときに飲めた。 4. 長谷川ひとりで一杯のロキシを飲んだが、Package で済ませた * ネパール人 (ガイド・ポーター含む) は宿代、食事代が半分以下 長谷川ランタン 6 月 (一泊二人で 5,000Rs のうち、ガイドは 800Rs)		
交通費		
Kathmandu 空港送迎 \$16 = NR2000 (Fuji Hotel が無料で提供した)		16
Kathmandu to pokhara by private van: Hiace Van: Rs. 24000 ( \$195 ) Jeep/ Scropio : Rs. 22000. ( \$180 )		195
当初予定 : Pokhara to Ulleri by 4x4 private jeep: \$122 = NP15,000		122
当初予定 : 下山後 Kande-Pokhara and to Bhandipur by van		75
当初予定 : Bhandipur to kathmandu by van ( Private)		120
* 参考 : 長谷川 バス代 : ガンドルン⇒ポカラ 500Rs タクシーで乗り換え (ポカラで) : 7 分位で 300Rs バス代 : ポカラ⇒ムグリン : 500Rs. ムグリン⇒チトワン 200Rs タクシー代 : ムグリン⇒Bandipur Rs.1,000 (バイティカで割高) バス代 : チトワン⇒カトマンズのバスターミナル : 700Rs タクシー代 : カトマンズのバスターミナル⇒Fuji Hotel 700Rs		

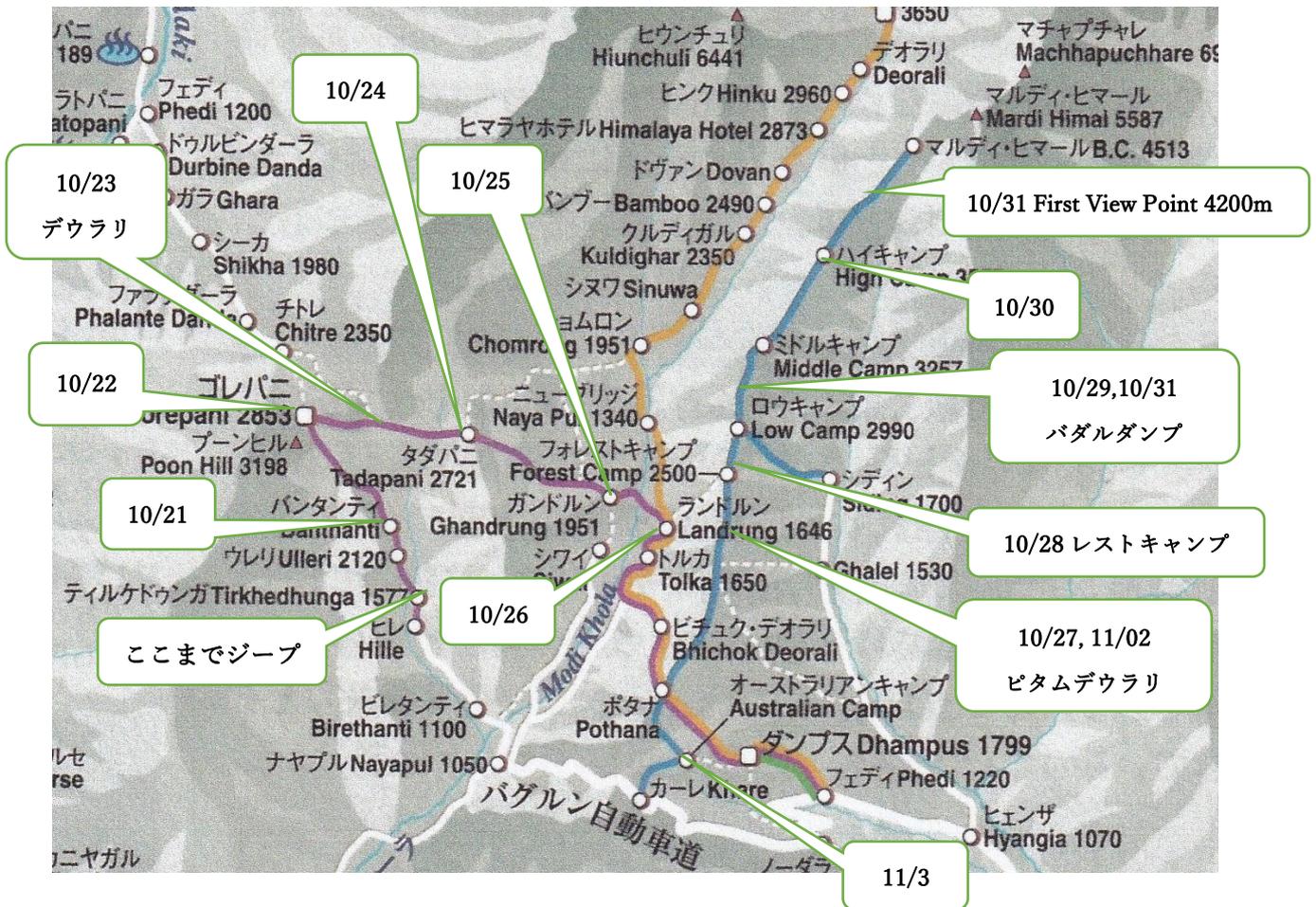
関連情報： 為替、賃金、物価

為替推移 (円/ドル)		
2022年3月中旬	2022年10月中下旬	2023年1月17日
118円/ドル	148円位/ドル	128円位/ドル
為替推移 (円/Nepal Rupees) : 春 0.9円位/Rs. 10月 1.1円位/Rs. 1月7日 0.98円/Rs.		
ネパールの最低賃金：月 15,000 Rs.= 16,500 円		
ポーターが今回16日間仕事して：(カトマンズでは無給)		
1500 NR/人/日 (US\$13/人/日)x 16日=24,000NR=26,400円		
平均的なネパール人給料：2万円 (大卒英語教師) から3万円 (公務員最低3.5万円に)		
コロナでカトマンズのホテル従業員は多くが外国に働きに出て、今は4万円要求とか		
トレッキング域内共通メニュー価格：外国人向け (参考：ランタン地域のバス発着地)		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダルバート、タルカリ： チキンあり 600 チキンなし 500</li> <li>・ビール： Tuborg 600, Everest 500</li> <li>・Milk Tea 100, Milk Coffee 150, Coke/Fanta 500ml 200, Hot Water 50</li> <li>・フライドライス：600</li> <li>・Mixed Pizza : 600</li> <li>・Mixed Thukpa (チベット風湯麺)：600, Plain Thukpa: 300, Veg. Thukpa:400</li> <li>・Chowmein (焼きそば)： Plain 300, Vegetable 400, Chicken 500, Mixed 600</li> <li>・Breakfast set : 700</li> </ul>		
お酒のチャンがなかった：ティルケドゥンガー、ゴレパニ、ガンドルン地域で		
なお、カトマンズの庶民の店では、ペットボトルの水が20-25 Rupees, 缶ビール 200Rs. 瓶ビール 300-350 Rs. 以下はネパール人にとっても安いところ (おなかを壊しやすい)		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダルバート、タルカリ： チキンあり 140 チキンなし 100</li> <li>・Milk Tea 30, Milk Coffee 40,</li> <li>・フライドライス：150</li> <li>・Mixed Thukpa (チベット風湯麺)：140 Veg. Thukpa:120</li> <li>・Chowmein (焼きそば)：Vegetable 120, Mixed 140</li> </ul>		
アプリでタクシーを呼ぶのが普及していて、また格安だった。		
夜9時過ぎに携帯アプリでバイクを呼び、後ろの座席に座り、20分ほど走ってもらって数百円だった。夜9時を過ぎると、あの大渋滞のカトマンズの道路がほとんど車なし。		

Gorepani - Mardihimar (Annapurna)/Katakura トレッキング日程記録表						
	日付		到着宿泊地	標高	歩行	備考
1	10/19	水	Kathmandu/ Tamel	1300	-	NRT10:30 KTM15:30 RA434 /Fuji hotel
2	10/20	木	Pokhara	825	-	Kathmandu 8:00 - Pokhara 18:00
3	10/21	金	Bantanthi	2210	2.5 hrs	ティルケデュンガー12時頃発
4	10/22	土	Ghorepani	2850	4 hrs	ナンゲタンティでお茶
5	10/23	日	Poonhill 往復 デウラリ	3200 3100	5 hrs	ゴレパニに戻り朝・昼兼用食
6	10/24	月	Tadapani	2750	4 hrs	バンタンティでお茶
7	10/25	火	Ghandrung	1951	4hrs	
8	10/26	水	Landrung (モディコーラ川)	1646	4 hrs	長谷川 Ghandrung →Pokhara →ドゥムレ→Bandipur (by Bus)
9	10/27	木	ピタムデウラリ	2100	4.5 hrs	長谷川→Chitwan (by Bus)
10	10/28	金	レストキャンプ	2640	5 hrs	
11	10/29	土	バダルダンプ	3200	4 hrs	
12	10/30	日	High Camp	3600	2 rs	長谷川→カトマンズ (by Bus)
13	10/31	月	バダルダンプ	3200	7 hrs	ファーストビューポイント (4200 m) 往復
14	11/1	火	フォレストキャンプ	2500m	4 hr -	
15	11/2	水	Pitam Deurali	2100	5 hr	
16	11/3	木	オーストラリアンキ キャンプ	2300	2 hr	
17	11/4	金	Pokhara	900/1000	1 hr	カーレで下山し車でポカラへ
18	11/5	土	Kathmandu/Tamel	1200	-	カトマンズへ飛行機で移動
19	11/6	日	Kathmandu/Tamel		-	観光：Kirtipur, Patan/Sitar
20	11/7	月	Kathmandu/Tamel		-	観光：Baktapur/Banepa
21	11/8	火	Flight to Japan / 4人 長谷川は11日夜便		-	観光：Swayambunat, Bodonat RA433,KTM23:25, 成田 09:00(+1)

アンナプルナ トレッキング地図と宿泊地

「ゴレパニ～ガンドルン (紫)」「マルディ・ヒマール (青色)」



タダパニの朝： アンナプルナサウス 7219m、ヒユンチュリ 6441m、マチャプチャレ 6993m

たくさんの外国人トレkker： 朝日にヨガをする人たちもいた



タダパニのホテル前で 朝マチャプチャレ、アンナプルナを仰ぎながら



野鳥の会の門口さん：ネパール国鳥ダンフェ（虹色のキジ）を見るのが夢だった。



## ヒマラヤトレッキングで見た野鳥と植物: 門口さん提供

ティルケンドウンガー (標高 1577m) ~ゴレパニ~ガンドルン~ハイキャンプ (標高 3557m) ~ポカラ間で出会った野鳥や植物。



**ヒマラヤハゲワシ** ヒマラヤ高地に生息するワシ。世界最大級の鳥。当初イヌワシと思ったが、頭が白くて尾が短いのでヒマラヤハゲワシとした。



**カバイロハッカ** (インドハッカ) 近年アジアや東南アジアに移入され野生化している。ガンドルンのホテルで見た。



**ヤマザキヒタキ** ガンドルン付近の杭に止まっていた。日本では迷鳥。



**バリケン** 家畜です。庭先で飼育していた。



**シロミヒヨドリ** 黒い頭に白い頬、お尻の黄色が目立つ。モディコーラ川近くのロッジで見た。



**キンイロヒタキ** ヒマラヤから中国南部ミャンマーに分布する。キ



**キンバネガビチョウ** 中国本土からネパールなどに生息する。黄色 (金色) の翼と白い眉にあごひげのような白斑が特徴。



**キバシサンジャク** 黄色のくちばし長い尾に物差しのような白斑が見えた。カラスの仲間でネパールやインド北部に分布する。



**ノジログビチョウ** ヒマラヤ、中国西部、台湾に生息する。レストキャンプ周辺の樹林にいた。



**イエスズメ** ポカラの湖畔で、露店が並ぶ道端に数羽いた。スズメに似ているが頬の黒斑がない。



**タカサゴモズ** アジアの南部に生息する。全長 25 cmで、モズより大きい。

ネパールで見た植物



ヒマラヤザクラ (バラ科)



ニオイザクラ (アカネ科) ルクリア



ネパールリンドウ (リンドウ科)



シャクチリソバ (タデ科)



エンジェルストランペット



オオルリソウ (ムラサキ科)



サクラソウ (サクラソウ科)



アキノキリンソウ (キク科)